第４章　調査成果の検討

第１節　岩窟遺構の構造

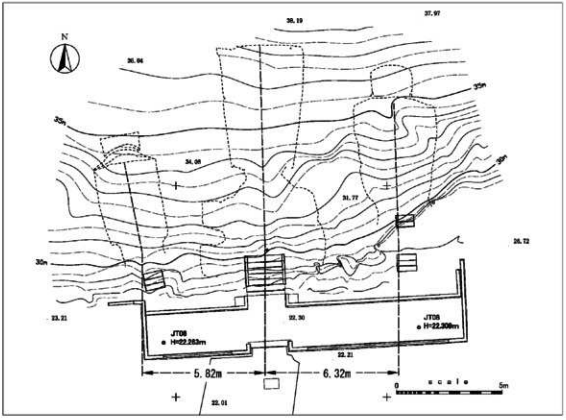
三井　猛（有限会社三井考測）

第１項　３窟の位置関係

第３章第３節で述べたように直縣洞が築造された地形は急斜面の丘陵地裾の露岩した砂岩質の崖面に３窟が並べられている様に岩窟が築造されている。

砂岩質といえ岩質は堅く大きな横穴を掘削することは容易には出来ない。また、岩窟内を観察すれば岩窟軸方向に対して斜めに幾筋もの断層面を確認出来る。断層や亀裂は岩窟築造時の事故に繋がる危険性が有ると同時に築造時にこの断層を利用して穴を掘り始めることは十分に考えられる。しかしながら、３窟を近距離で並べて岩窟築造するためにはかなりの危険性を伴うことは事実である。築造時の工人グループは熟練した技術者だけではなく技巧的に未熟な工人も含まれていることは現代も過去も同様であろう。そのため直縣洞築造には、ある築造規格や設計思想そして計画性を持って作られたと考えるべきではないだろうか。

遺構を調べるにあたって詳細な計測調査をすることで、遺構を作った築造者がどのように作りその結果何が出来上がったのか、規格性の有無や設計思想は何であるかの一端を知ることが出来る。



第4-1図　直縣洞３窟位置と間隔

直牒洞３窟の位置関係を遺構計測で得た結果から解析してみると次のようなことが判明した。位置測定使用した基準は左右窟の羨門床面の中心と中央窟では奥壁幅中心点と玄室入口の羨門中心点を結んだ岩窟中心軸線上の岩窟入口に測定ポイントを設定した。この羨門や入口に測定ポイントを設けるのは、横穴を築造始める際の基準となる位置であるからである。なお、中央窟の測定ポイントを玄室奥壁中央と内部羨門中心を結んだ軸線延長上にしたのは岩窟入口が崩落等により明確に分からない状態であるからである。（第 4-1 図）

左窟と中央窟の間隔は水平距離で 5.82 m、中央窟と右窟の間隔は水平距離で 6.32 m である。中央窟の入口中心位置が不明瞭であるため、仮に左右窟間の 1/2 であっても 6.07 m の間隔でありほぼ等間隔に築造したと考えられる。

では、この岩窟の間隔を古代尺に変換したらどのように見えるかを試みてみる。

古代尺変換表			
古代尺	曲尺	メートル法（m）	備考
高麗尺の1尺	1尺1寸6分	0.351	大宝律令以前の尺　唐大尺の1尺2寸
唐大尺の1尺	9寸7分	0.294	大宝律令の大尺（土地の計測）
唐小尺の1尺	8寸8里	0.246	大宝律令の小尺（楽器や道具類？）
古代間尺（1間）	唐大尺の6尺を1間、高麗尺の5尺と等しい。		

※唐大小尺は隋の大小尺制を受け継ぐ。

第 4-1 表　古代尺変換表

遺跡を解析するためには、古代の建造物を分析する上で構造を分解し再構築する必要がある。そのため建造物を組み立て直すためには現代のメートル単位を使用した再構築方法では十分な理解をすることは困難である。

現代のメートル法から古代尺の単位変換による測定値の解析は、遺構の築造当時の尺度を用いた上で分析することで設計基準や設計思想を導き出す方法である。現代のメートル法と異なり古代尺は使用する対象によって使い分けをしていたと考えられ、唐大尺が後世の曲尺１尺の元となり近世まで若干の改変をされながら土木や建築で使用されたてきた。（第 4-1 表）

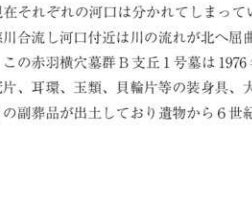
直牒洞３窟の位置関係と同様な解析事例は、2009 年～ 2014 年に実施した十五郎穴横穴墓群（ひたちなか市）測量調査時に発掘された十五郎穴館出支群Ⅰ区の３基並列する横穴墓第 32 号墓　第 33 号墓　第 35 号墓で、３基の横穴墓羨門中心位置の間隔が 32 号墓－ 33 号墓の間隔が 5.877 m（唐大尺 19.99 尺）、33 号墓－ 35 号墓の間隔が 5.854 m（唐大尺 19.91 尺）のそれぞれ約２丈（20 尺）で作られていることが精密計測で判明している。（三井 2016）なお、この３横穴墓の出土土器から推定される年代は何れも８世紀第二四半期が上限（佐々木 2016）となることから横穴築造年代的にも唐大尺を用いたことは十分に整合性がある。

直牒洞３窟は、左窟と中央窟間が実測値 5.82 m（唐大尺 19.80 尺）、中央窟と右窟間が 6.32 m（唐大尺 21.5 尺）となり誤差率で考えれば左窟と中央窟間は２丈（20 尺）の－ 0.01％、中央窟と左窟間は＋ 0.75％誤差となる。このことから、３窟間の距離をそれぞれ２丈（20 尺）の間隔を意図的に設けて作られたと推定できる。（第 4-2 表）

3窟間測定値の古代尺換算		
基準尺	左岩窟羨門中心－中央岩窟入口中心	中央岩窟入口中心－左岩窟羨門中心
メートル法	5.820	6.320
高麗尺	16.55	17.98
唐大尺	**19.80**	**21.50**
唐小尺	23.77	25.81

第4-2表　３窟間の距離変換

第4-2図　直牒洞中央窟槍鉋工具痕跡



第4-3図　直牒洞左窟工具痕跡

玄室の床面形状ははっきりとした逆台形で棺台を持つ。前室の床面も左右壁面に作られた方形のやぐら部を除くと玄室と同型の逆台形の床面を確認出来る。なお、奥壁付近の棺台上には数十個程度の少量の小亜円礫が残存している。床面が後世の改造により大きく改変を受けてしまっているため、この小亜円礫は元々有った物か、後世に持ち込まれた物かは不明である。

また、中央窟玄室左右壁面には横穴墓に多く使用事例が確認されている槍鉋と同様の仕上げ削りの槍鉋工具痕跡を確認することができ、その工具痕跡表面は塩化によって硬化している（第4-2図）。この槍鉋工具痕跡は左窟と右窟では確認出来ず、非常に鋭角な工具の痕跡が壁面全体に施されている（第4-3図）。

以上のことから、中央窟の横穴構造は７世紀以前の古いの大型横穴が元々有り、左右窟は８世紀以降の後世に至って中央窟を中央位置に合わせて築造されたと推測することが出来る。

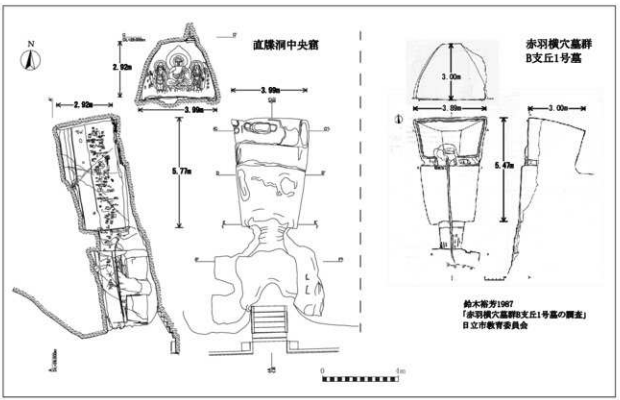
第２項　中央窟の構造と比較

直牒洞中央窟の構造に類似する大型横穴墓で規格等の数理的比較が出来る横穴墓が日立市久慈町５丁目地内に所在する赤羽横穴墓群Ｂ支丘１号墓がある。赤羽横穴墓群は直牒洞より約 13km下流の久慈川水系茂宮川左岸の河岸段丘上丘陵地内の三方山に囲まれた小さな谷津の岸壁に築造されており、直牒洞の所在地と地形の条件が似ている。

また、赤羽横穴墓群の所在する地は久慈川・茂宮川河口から約 1.2km上流の河口域に位置しており、現在それぞれの河口は分かれてしまっているが久慈港整備以前の 1970 年代初頭までは茂宮川が久慈川合流し河口付近は川の流れが北へ屈曲して海に注ぎ込む水運にとって良好な地であった。

この赤羽横穴墓群Ｂ支丘１号墓は 1976 年に日立市教育委員会により発掘調査がなされ須恵器片、冠片、耳環、玉類、貝輪片等の装身具、大刀片、刀子片、弓飾金具、鉄鏃等の武器、馬具類等の多くの副葬品が出土しており遺物から６世紀後葉の大型横穴墓と推定されている。（鈴木 1987）

この赤羽 B1 号墓の調査では横穴墓の規模も計測されており、報告書で記載された限られた情報だけではあるが直牒洞中央窟との比較を行った。



第 4-4 図　直牒洞中央窟と赤羽横穴墓群 B 支丘 1 号墓の比較図

赤羽 B1 号墓の玄室の床は逆台形で奥壁手前に棺台を有した礫床であり、玄門や左右側壁、天井は大きく破損しいるものの玄室奥の棺台上部の天井は残存している。天井は報告書の図面を見てみると平天井の棟を持つアーチ型天井である。床の平面形状は奥壁側に長い逆台形をしており、失われた玄門は床面痕跡から判断すると長さのある玄門であったと考えられる。また、前室または前庭の床の痕跡が僅かに検出されているが前室の有無は不明である。（第 4-5 図）

直牒洞中央窟と赤羽横穴墓群 B 支丘 1 号墓は展開図上で形状を比較すると奥壁、玄室平面形、軸線縦断面形、玄門の長さ（羨道）とも類似点が多い。さらに計測された規格性を比較してみると次のようなことが判明した。（第 4-3 表）しかしながら、直牒洞 3 窟では岩窟構造が左右窟と中央窟では構造様式に隔たりがある。左右窟と中央窟には岩窟内の構造にも相違点があり、左右窟は天井がアーチ型で単室構造の玄室に床面が不定型な逆台形に近い奥壁側に長い長方形の形状に対し、中央窟の天井は高くアーチ型に平天井の棟を持ち前室と後室（玄室）の二室構造となっている。

比較した計測値は、直牒洞が今回測量した実測値を使用し、赤羽横穴墓群 B 支丘 1 号墓の計測値は報告書に記載の値である。

直牒洞中央岩窟と赤羽横穴墓群B支丘1号墓の比較（メートル法）						
	直牒洞中央岩窟		赤羽横穴墓群 B支丘1号墓		合致率	
平面形状	逆台形		逆台形		同型	
天井及び奥壁の形状	平天井を有すアーチ型		平天井を有すアーチ型		同型	
棺座の有無	有り		有り		同型	
玄室長	5.77	m	5.47	m	1 :	0.948
奥壁幅	3.99	m	3.86	m	1 :	0.967
前壁幅	2.92	m	2.29	m	1 :	0.784
棺座前端幅	3.69	m	3.09	m	1 :	0.837
天井高（奥壁部）	2.92	m	3.00	m	1 :	1.027
天井高（中央付近棺座前）	3.28	m	2.78	m	1 :	0.848
棺座高	0.3	m	0.3	m	1 :	1
玄門長（羨道長）	1.22	m	1.15	m	1 :	0.943
				合致率平均値	1	0.919

第4-3表　直牒洞中央窟と赤羽横穴墓群Ｂ支丘１号墓の規格性比較

上記比較表にあるように玄室内の主要構造箇所の比較は、直牒洞中央窟の実測値を１とした場合の赤羽横穴墓群Ｂ支丘１号墓の測定値の合致率を求めた。

この表で示すように複数の横穴墓が玄室構造の様式や規模が同じ場合、単なる形状模倣ではなく横穴の各部位毎の様式的規格性の有無検討や築造計画と横穴墓出来形の比較が可能となる。

測定値による比較箇所は、玄室長、奥壁幅、玄門付近の玄室幅、棺台前端幅、天井高（奥壁）、天井高（中央付近棺台前）、棺台高、玄門長（羨道長）の８箇所である。このうち合致率が94％以上と高い箇所は５箇所あり、合致率が低い３箇所でも玄門付近の玄室幅は78％、棺座前端幅83％、天井高（中央付近棺座前）84％であり８箇所全部の合致率平均値は91.9％と高い合致率となったのである。

この測定値による比較の結果から直牒洞中央窟と赤羽横穴墓群Ｂ支丘１号墓の構造的合致は、単なる偶然や模倣によることは考えにくく、建築様式の共有または定形化、横穴築造に特化した技術を持つ工人集団よる築造の可能性を含めて考察する必要があるであろう。

参考・引用文献

国史大辞典 10　1989　『歴史の中の単位』吉川弘文館　105 頁、480 頁－ 481 頁
小泉袈裟勝　1990　『図解・単位の歴史辞典』柏書房　93 頁、120 頁－ 121 頁、189 頁
佐々木義則　2016　「十五郎穴横穴墓の研究」『十五郎穴横穴墓群』ひたちなか市教育委員会　225 頁－ 236 頁
鈴木裕芳　1987　『赤羽横穴墓群　B 支丘１号墓の調査』日立市教育委員会
三井　猛　2010　「特殊光撮影による非接触調査」『文化財の壺 創刊号』文化財方法論研究会　12 頁－ 17 頁
三井　猛　2016　「十五郎穴横穴墓の研究」『十五郎穴横穴墓群』 275 頁－ 283 頁

第２節　直牒洞の線刻

梅田由子（有限会社三井考測）

直牒洞中央窟内部の壁面には多数の線刻が刻まれている。測量調査では第３章で述べたように３次元写真計測により羨道および玄室内部の壁面に残存する線刻をできうる限り記録した。本節では直牒洞中央窟内部の線刻について記録した結果について述べる。

直牒洞中央窟の壁面は経年による摩滅で形状の判別が困難な線刻が多くある。本節では、壁面に斜光を当てて壁面の凹凸を強調して撮影した画像から作成したオルソフォト（正射投影写真）を使用して形状が判別できる線刻のみを取り上げた。なお、線刻文字一覧の表において、判読不能箇所の文字数が分かるものは□、不明なものは〔 〕で表記した。

第１項　線刻の種類

・線刻石塔

直牒洞内部の線刻のうち最も数量が多いのは五輪塔の線刻であった。また多宝塔や宝篋印塔と考えられる石塔の線刻も存在する。線刻塔は羨門左壁、玄室（後室）左右壁、奥壁に分布している。線刻塔の数は直牒洞全体では部分的に残存しているものも含めて 127 基である。

・文字

文字の線刻は前室左壁、羨門左右壁、玄室左右壁、奥壁に分布している。経年による摩滅が多く判読できる文字は少ない。文字および文字らしきものと認識できた線刻は直牒洞全体で 50 か所存在する。

・その他

明確な形状は不明なものが多いが、人為的な線刻であると分かるものが前室および羨門左右壁、玄室左右壁、奥壁に存在する。本節では明確に形状が認識できた玄室右壁の一点のみを取り上げる。

第２項　左壁の線刻

(1) 左壁の線刻石塔

左壁の線刻石塔の数は、羨門左壁１基、玄室左壁 68 基の計 69 基である（第 4-6 図）。この内、五輪塔の形状の線刻石塔は 55 基である。線刻五輪塔のうち、17 は浮彫状に彫り込まれている（第 4-5 図）。五輪塔の一部と考えられる線刻は５基（第 4-6 図 1、49、55、60、64）、五輪塔の可能性がある線刻石塔は６基（第 4-6 図 6、7、27、30、41、62）、多宝塔の可能性がある線刻石塔は２基（第 4-2 図 8、9）、宝篋印塔の可能性がある線刻石塔は１基（第 4-6 図 67）である。

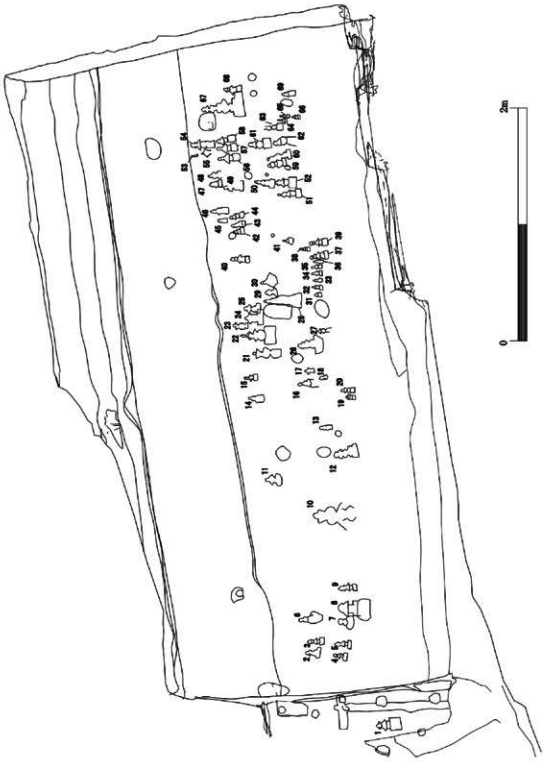
第 4-5 図 線刻石塔 左壁 17

左壁の線刻石塔の高さは最大で 38.18 ｃｍ、最小で 5.71 ｃｍを測る（第 4-4 表）。また、第 4-2 図の線刻五輪塔 31 ～ 35 や 42 ～ 43、56 ～ 58 のように近似する大きさの線刻石塔が並んで刻まれている箇所がある。

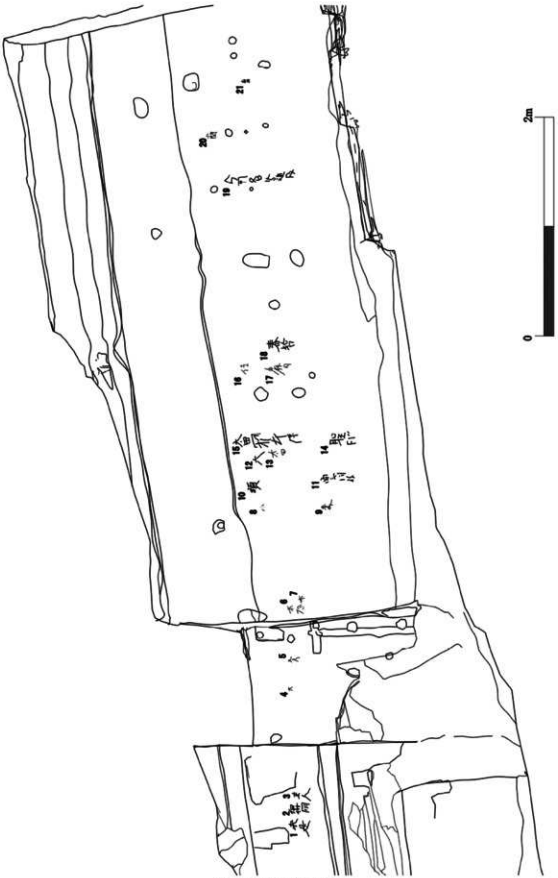
No	高さ（cm）	形状
1	21.59	五輪塔
2	13.66	五輪塔
3	14.65	五輪塔
4	12.16	五輪塔
5	14.34	五輪塔
6	20.11	五輪塔か
7	13.57	五輪塔か
8	26.67	多宝塔か
9	16.37	五輪塔
10	36.81	多宝塔か
11	14.34	五輪塔
12	21.34	五輪塔
13	10.84	五輪塔
14	13.32	五輪塔
15	11.58	五輪塔
16	17.85	五輪塔
17	7.98	五輪塔（浮彫状）
18	6.97	五輪塔
19	8.26	五輪塔
20	11.66	五輪塔
21	24.47	五輪塔
22	30.44	五輪塔
23	12.51	五輪塔
24	15.76	五輪塔
25	14.20	五輪塔
26	22.12	五輪塔
27	11.35	五輪塔か
28	32.60	五輪塔
29	10.41	五輪塔
30	14.49	五輪塔か
31	6.29	五輪塔(一部)
32	9.28	五輪塔
33	7.95	五輪塔
34	9.37	五輪塔

No	高さ（cm）	形状
35	9.26	五輪塔
36	8.65	五輪塔
37	15.83	五輪塔
38	9.11	五輪塔
39	15.83	五輪塔
40	16.54	五輪塔
41	9.58	五輪塔か
42	10.06	五輪塔
43	12.17	五輪塔
44	12.73	五輪塔
45	7.96	五輪塔
46	15.70	五輪塔
47	10.85	五輪塔
48	12.02	五輪塔
49	17.27	五輪塔(一部)
50	17.41	五輪塔
51	20.40	五輪塔
52	18.00	五輪塔
53	5.71	五輪塔
54	20.61	五輪塔
55	8.42	五輪塔(一部)
56	18.86	五輪塔
57	17.94	五輪塔
58	16.72	五輪塔
59	16.11	五輪塔
60	21.15	五輪塔(一部)
61	19.95	五輪塔
62	19.33	五輪塔か
63	15.64	五輪塔
64	8.58	五輪塔(一部)
65	8.22	五輪塔
66	7.11	五輪塔
67	38.18	宝篋印塔か
68	15.57	五輪塔
69	11.81	五輪塔

第 4-4 表　左壁線刻石塔 計測表



第4-6図 左壁 線刻石塔



第4-7図 左壁 線刻文字

(2) 左壁の線刻文字

左壁の線刻文字は前室左壁に3か所、羨門左壁に2か所、玄室左壁に16か所存在する（第4-7図）。壁面の風化や摩滅によって判読できない文字が多数ある。線刻文字11は「南無阿弥」、線刻文字21は「南無」と判読でき、線刻五輪塔との関連が推測される（第4-5表）。

第3項 右壁の線刻

(1) 右壁の線刻石塔

右壁の線刻石塔は、前室および羨門部壁面にはなく玄室右壁のみに54基存在する（図4-11）。この内五輪塔の形状の線刻石塔は55基である。線刻五輪塔のうち122と123は浮彫状に彫り込まれている（第4-8図）。また105は五輪塔の火輪と水輪に種字らしき線刻が刻まれている（第4-9図）。五輪塔の一部と考えられる線刻は9基（第4-10図-75、83、85、87、92、94、96、107、121）、五輪塔の可能性がある線刻石塔が1基（第4-10図84）である。右壁の線刻石塔の高さは、最大で49.55cm、最小で3.02cmを測る（第4-6表）。

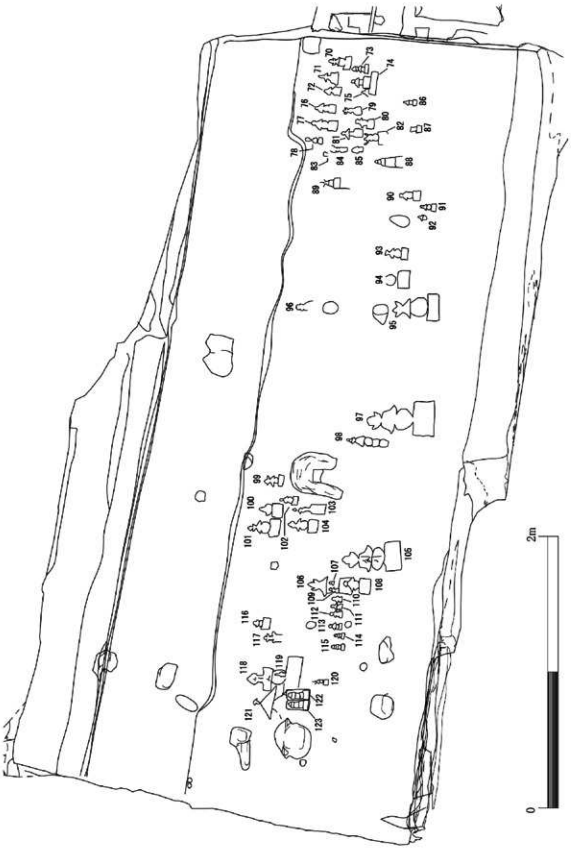
左壁と同様に第4-10図の107～115は近似する大きさの線刻五輪塔が並んでいる。また、106～108、118～123は線刻石塔が重なり合って彫られている。

NO	文字	位置
1	□□（未足か）	前室左壁
2	□□□	前室左壁
3	□□（未人か）	前室左壁
4	大	羨門左壁
5	又□	羨門左壁
6	木原	玄室左壁
7	木	玄室左壁
8	小	玄室左壁
9	春□	玄室左壁
10	額	玄室左壁
11	南無阿弥	玄室左壁
12	六	玄室左壁
13	太田	玄室左壁
14	聖□	玄室左壁
15	太田□□□	玄室左壁
16	□	玄室左壁
17	□□介	玄室左壁
18	春哲	玄室左壁
19	□□□□道及	玄室左壁
20	小関	玄室左壁
21	南無	玄室左壁

第4-5表 左壁 線刻文字一覧

第4-8図 線刻五輪塔 右壁122・123

第4-9図 線刻五輪塔 右壁105



第4-10図　右壁 線刻石塔

第 4-6 表 右壁線刻石塔 計測表

No	高さ（cm）	形状
70	16.82	五輪塔
71	14.55	五輪塔
72	12.69	五輪塔
73	12.04	五輪塔
74	18.63	五輪塔
75	4.79	五輪塔（一部）
76	15.77	五輪塔
77	19.62	五輪塔
78	13.00	五輪塔
79	13.64	五輪塔
80	13.97	五輪塔
81	15.95	五輪塔
82	17.74	五輪塔
83	3.02	五輪塔（一部）
84	12.49	五輪塔か
85	8.29	五輪塔（一部）
86	10.05	五輪塔
87	8.05	五輪塔（一部）
88	20.72	五輪塔
89	21.47	五輪塔
90	15.34	五輪塔
91	12.01	五輪塔
92	6.09	五輪塔（一部）
93	16.76	五輪塔
94	17.25	五輪塔（一部）
95	34.48	五輪塔
96	12.53	五輪塔（一部）
97	49.55	五輪塔
98	30.63	五輪塔
99	14.48	五輪塔
100	17.65	五輪塔
101	23.75	五輪塔
102	13.60	五輪塔
103	24.33	五輪塔
104	21.98	五輪塔
105	43.45	五輪塔（種字あり）
106	33.42	五輪塔
107	3.66	五輪塔（一部）
108	20.05	五輪塔
109	7.31	五輪塔
110	7.64	五輪塔
111	8.31	五輪塔
112	9.45	五輪塔
113	9.79	五輪塔
114	8.06	五輪塔
115	9.93	五輪塔
116	12.45	五輪塔
117	13.33	五輪塔
118	39.06	五輪塔
119	7.78	五輪塔
120	11.84	五輪塔
121	22.36	五輪塔（一部）
122	15.55	五輪塔（浮彫状）
123	14.64	五輪塔（浮彫状）

第 4-11 図 線刻文字 36 およびその他の線刻

(2) 右壁の線刻文字

右壁の線刻文字は羨門右壁に３か所、玄室右壁に 22 か所存在する（第 4-12 図）。左壁と同様に壁面の風化や摩滅で判読できない文字が多い。線刻文字 34、39、40、42 ～ 45 は「南無阿弥」と判読でき、線刻石塔との関連が推測される。また線刻文字 35、37 はそれぞれ線刻五輪塔 95、97 の内部に位置しており線刻五輪塔に伴う文字の可能性がある。また、線刻文字 36 は「天正七六月十日」と判読できる（第 4-7 表）。

(3) 右壁のその他の線刻

線刻文字 36 の左側に五鈷杵のような形状の線刻が存在する（第 4-11 図、第 4-12 図）。

NO	文字	位置
22	□□（三比か）	羨門右壁
23	小□	羨門右壁
24	□	羨門右壁
25	初	玄室右壁
26	宗	玄室右壁
27	□	玄室右壁
28	□	玄室右壁
29	本	玄室右壁
30	タ	玄室右壁
31	け	玄室右壁
32	□田	玄室右壁
33	□泰	玄室右壁
34	南無阿弥	玄室右壁
35	存故 （五輪塔95に伴う？）	玄室右壁
36	天正七六月十日	玄室右壁
37	長善 （五輪塔97に伴う？）	玄室右壁
38	□□□□□	玄室右壁
39	南無阿弥	玄室右壁
40	南無阿弥	玄室右壁
41	種字（バン）か	玄室右壁
42	南無阿弥	玄室右壁
43	南無阿弥	玄室右壁
44	南無阿弥	玄室右壁
45	南無阿弥	玄室右壁
46	頁	玄室右壁

第 4-7 表 右壁 線刻文字一覧

第４項 奥壁の線刻

(1) 奥壁の線刻石塔

奥壁の線刻石塔は５基存在する（第 4-13 図）。この内線刻五輪塔線刻は４基、線刻五輪塔の可能性がある線刻石塔は１基である。

線刻石塔 123 は右脇侍像の光背部分に彫られている。奥壁の線刻石塔の高さは最大 21.16 ｃｍ、最小 10.41 ｃｍである（第 4-8 表）。

(3) 奥壁の線刻文字

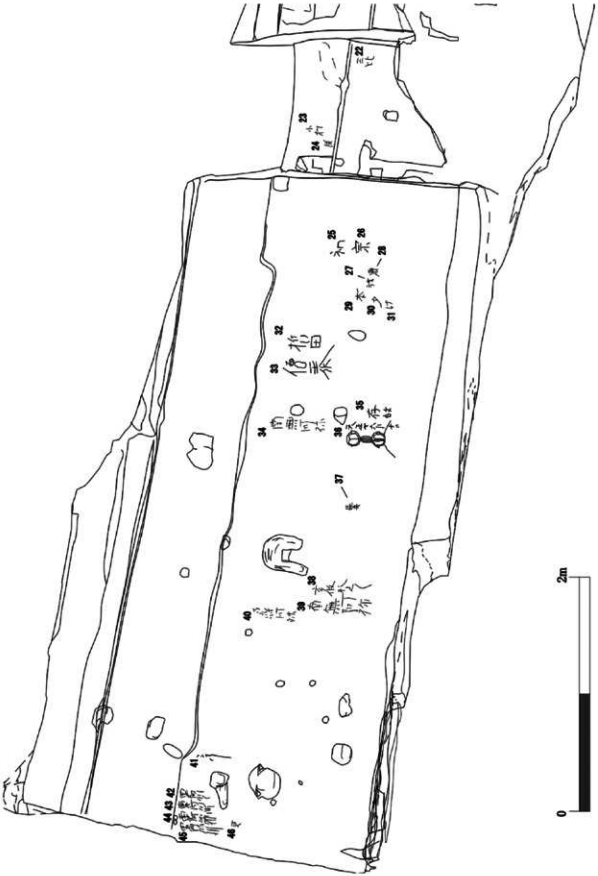
奥壁の線刻文字は４か所存在する（第 4-14 図）。この内、線刻文字 47 の一部に「十月」の文字が判読でき、同 48 は「有長判」と判読できる（第 4-9 表）。

No	高さ（cm）	形状
123	21.16	五輪塔
124	10.69	五輪塔
125	10.41	五輪塔
126	12.51	五輪塔か
127	20.33	五輪塔

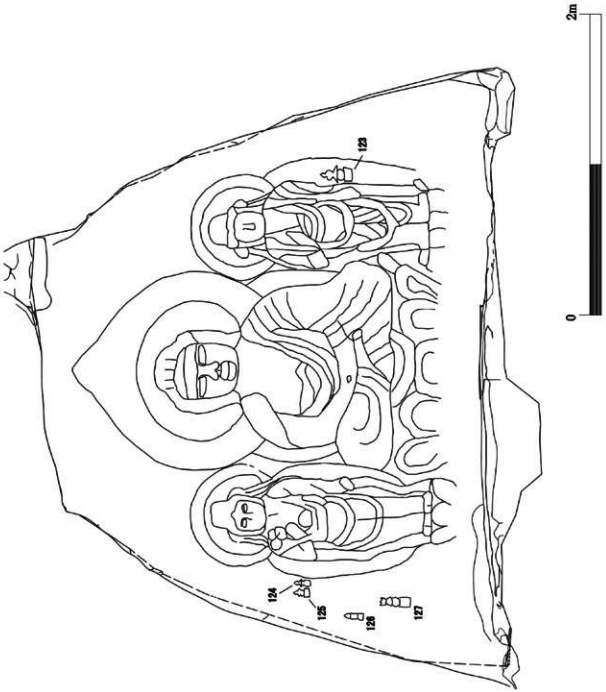
第 4-8 表 奥壁 線刻石塔計測表

NO	文字	位置
47	〔　　〕三〔　　〕 〔　　〕十月	奥壁
48	有長判	奥壁
49	□本	奥壁
50	人	奥壁

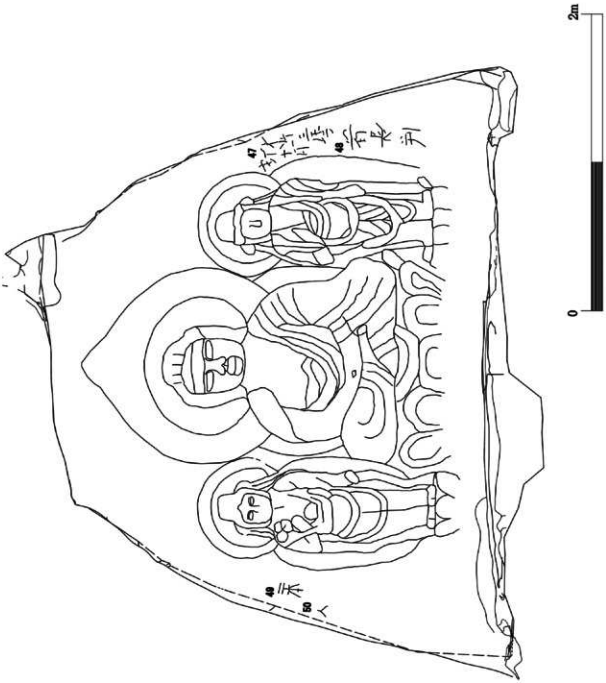
第 4-9 表 奥壁 線刻文字一覧表



第4-12図 右壁 線刻文字



第4-13図 奥壁 線刻石塔



第4-14図 奥壁 線刻文字

第５項 まとめ

直牒洞中央窟の壁面に彫られた線刻石塔群は、大きさと形状にばらつきがある。一部の石塔は重なり合っており、彫られた時期が前後すると考えられる。また、線刻石塔の位置は、一部近似する大きさの石塔が並ぶ箇所があるが、壁面全体でみると規則性に乏しい。これらのことから、複数の人間によって継続して線刻石塔が彫られた時期があると推測する。

奥壁の線刻五輪塔 123 は右脇持像の光背部分に彫られており、阿弥陀三尊仏の造立後、後世に彫られたものと考えられる。また玄室右壁の線刻文字 36 は「天正七六月十日」と判読でき、直牒洞内部に線刻が彫られた年代と関わる可能性がある。

五輪塔は平安時代に成立した地・水・火・風・空の五大思想を象った石材を組み合わせた石塔だが、15 世紀中期以降に小型化と簡略化が進み、畿内では五輪板碑、尖塔状五輪板碑、一石五輪塔が展開する。小型化の要因には石塔造立階層の拡大があり、戦国期には武士階層だけでなく上層の庶民階層・自営農民クラスまで営墓がおこなわれた（藤澤 2012）。関東地方では天正期、16 世紀末に伊豆安山岩製や銚子砂岩製などの一石五輪塔が現れるが、17 世紀前半には畿内の動向と同じく姿を消すとされる（本間 2011）。

また、鎌倉の葬送遺構であるやぐらの内部の壁面にも浮彫状の五輪塔や線刻五輪塔が彫られている例があり、14 世紀後半以降に石塔や板碑での納骨が増加した際に石塔の代用として造塔が行われたと推測されている（古田土 2012）。

直牒洞内部の線刻石塔が天正７年（1579）頃もしくはそれに近い年代に彫られたとすると、各地域の五輪塔の展開とも符合する。直牒洞の所在する不軽山（阿弥陀山）には、永享４年（1432）に了誉聖冏の弟子了智が香仙寺を建立している。推測に過ぎないが、香仙寺の建立後、直牒洞が周辺地域の信徒にとっての信仰の対象となり、供養や仏との結縁を目的として直牒洞の内部に線刻石塔や「南無阿弥」などの線刻文字を彫る行為が行われていたのではないだろうか。

参考・引用文献

『茨城県史 』中世編　1986　茨城県
佐藤亜聖　2007 「中世石塔の成立と定着」『墓と葬送の中世』狭川真一編 高志書院
本間岳人　2011 「1 信仰と石造文化財」『考古調査ハンドブック５石造文化財への招待』ニューサイエンス社
67 - 68 頁
藤澤 典彦　2012 「墓上の石塔」『中世石塔の考古学』狭川真一・松井一明編 高志書院　259-260 頁
古田土 俊一　2012 「中世前期鎌倉における五輪塔の様相」『考古論叢神奈河』第 20 集　31-33 頁

第3節　横穴墓としての直牒洞

稲田健一（公財）ひたちなか市生活・文化・スポーツ公社
ひたちなか市埋蔵文化財調査センター

第1項　仮称：直牒洞横穴墓

(1) 直牒洞は横穴墓か

直牒洞を最初に訪れたのは1995年だったと記憶している。当時市内の長者屋敷遺跡で発掘調査が実施されており、その遺跡の現地説明会の帰りに訪問した。訪れた理由は職場の佐々木義則から、直牒洞中央窟は横穴墓を改変していないかという質問に答えるためだった。その頃の私は横穴墓の見学例も少なく、何よりも勉強不足のため、その巨大さに圧倒され、こんな巨大な横穴墓はないと答えてしまったのである。

ここでの報告では、若い自分への反省を込めて、直牒洞中央窟は横穴墓を改変したものだという理由を説明したい。

なお、名称については、現在登録している名称は「直牒洞」であり、遺跡名としては「善光寺遺跡」に含まれ、横穴墓としての名称はない。よって、ここでは仮称として直牒洞中央窟を「直牒洞横穴墓」として報告する。

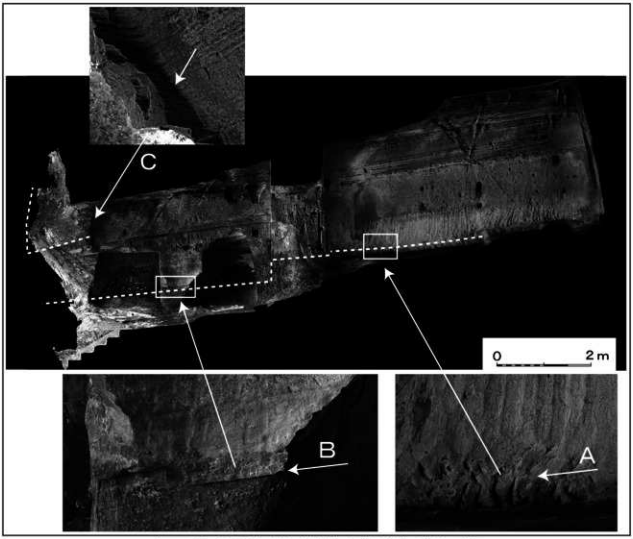
(2) 直牒洞中央窟は横穴墓だ

後世の改変　直牒洞中央窟を観察すると、後世の改変以前の横穴墓だった「名残」が観察できる。玄室の奥壁は仏像が造作された部分以外は基本的に当時の壁面であることが、工具痕から判る。ちなみに、横穴墓によく見られる工具痕は、幅10cmほどのU字状の刃先をもつ工具や幅5cmほどの直線状の刃先をもつ工具などによる痕跡で、後世のものはノミのような先の尖った工具による痕跡であり、そこで違いがわかる。両側壁についても、工具痕から当時の壁面に五輪塔などが掘られているが、中央付近から玄門にかけては最下部に違う道具による工具痕がみられ、改変されていると思われる（第4-15図A）。よって中央付近から玄門にかけての床面全体が掘削されていることになる。

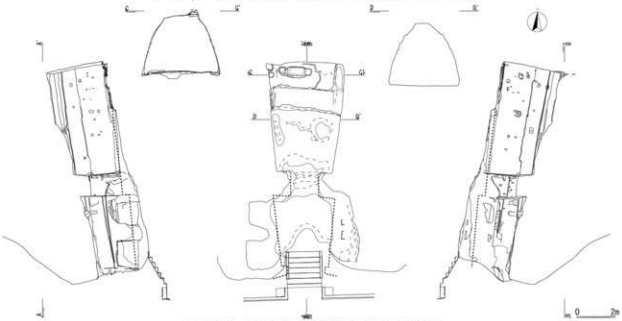
直牒洞横穴墓玄室写真（人物の身長約167cm）

床面の掘削は玄門・羨道・羨門にかけて徐々に深くなっていく。羨道の一部に当時の床面を推定できる箇所がある（B）。第4-15・4-16図に書き入れた点線は当時の床面を推定したものである。直牒洞中央窟はこのように床面以外は比較的横穴墓の名残をよく残しているが、玄門から羨門にかけては大きく改変されている。羨門については、玄室側がかろうじて確認出来るのみである（C）。

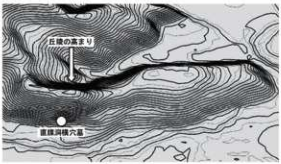
直牒洞中央窟の両側に位置する岩窟については、横穴墓のような形状をしているが、壁面全体の工具痕がノミのような先の尖った工具による痕跡しか確認出来ない。壁面全体をすべて改変して



第 4-15 図　直牒洞中央窟の横穴墓の名残と後世の改変の痕跡



第 4-16 図　直牒洞横穴墓実測図（点線は推定線）



第4-17図　直縣洞横穴墓の立地（国土数値情報（国土交通省）を加工して作成）

一回り大きくした可能性も考えられるが、後述するように大型横穴墓は単独で存在する例が多いことを考慮すると、両側の岩窟については横穴墓の改変ではなく、後世につくられたものと考え、私の報告では横穴墓ではないと判断した。よって、直縣洞横穴墓は中央窟1基のみをさす。

構造と規模と立地　構造と規模については、調査報告に詳細に掲載されているため、横穴墓としての構造と規模を簡単に掲載する。

直縣洞横穴墓は、玄室、玄門、羨道、羨門からなると推定される。

玄室の規模は、奥行5.77 m、奥壁幅3.99 m、前壁幅2.92 m、奥壁部天井高2.92 mを測る。平面形は逆台形を呈する。床面は、奥壁から主軸上で約2.4 mの長さで一段高く、屍床としている。奥壁形状（横断面）は側縁にやや膨らみをもつ台形状である。立面形は台形型。天井は狭い平天井である。排水溝はない。

玄門の規模は、奥行1.22 m、羨道部側幅約2.8 m、玄室側推定高約2.4 m、羨道側推定高約2.6 m、開口部幅約1.9 m、開口部高約1.6 mを測る。床面は改変され、排水溝などの有無は不明である。立面形は、やや縦長のドーム形で、開口部は方形状を呈する。

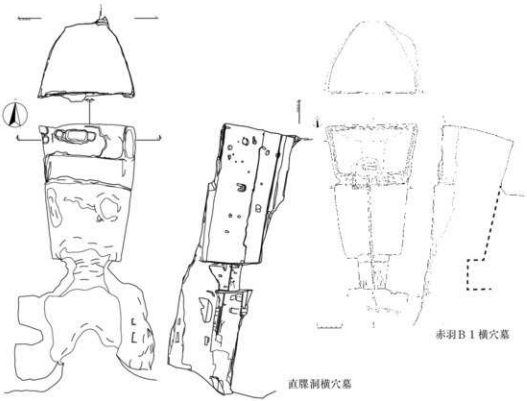
羨道部の規模は、西壁上面で奥行約3.8 mを測る。床面は改変され、当時の姿は推定できない。西壁上面に羨門の痕跡があり、形状から立面形は玄門と同じドーム形状と思われる。

最近の横穴墓の調査では、横穴墓の上に墳丘がある例が増えているため、横穴墓の立地を確認しておく。直縣洞横穴墓は、細長く突出した台地の付け根近くに位置し、ほぼ直上にはやや高まった地形がみられる（第4-17図）。現地を確認すると、明かな墳丘は確認出来ないが、仮に台地の高まりが自然地形であっても、その高まりを意識した場所に横穴墓を構築しているように思える。

日立市赤羽横穴墓群B支丘第1号墓との比較　直縣洞横穴墓が横穴墓であることを裏付けるために、大型横穴墓との比較を行う。比較を行うのは直縣洞横穴墓から久慈川沿いに東に直線で約14kmの場所に位置する日立市赤羽横穴墓群B支丘第1号横穴墓（以下「赤羽B1横穴墓」）である。なお、直縣洞横穴墓と赤羽B1横穴墓との比較については、三井猛が第4章第1節で詳細な報告を行っているので、以下の記述はその報告に基づき加筆した内容である。

赤羽横穴墓群は、久慈川河口近くの水木段丘の崖面に構築されている。水木段丘の太平洋側は海蝕作用によって小さな谷が手の指のように入り込んでおり、南に向かって張り出した段丘にのみ横穴墓が構築され、構築されている張り出しに西からA支丘、B支丘、C支丘、D支丘と呼称されている。B支丘に位置する赤羽B1横穴墓は支丘を独占するかのように、舌状台地の先端部に単独で造営されている。これは、他の支丘で横穴墓が群集して造営されている状況と比較すると、赤羽B1横穴墓のもつ特異性が際立つ。

赤羽B1横穴墓の特異性は立地ばかりではなく、横穴墓の規模にもみられる。横穴墓の規模は玄



第 4-18 図　直牒洞横穴墓と日立市赤羽Ｂ１横穴墓（(鈴木 1987）に一部加筆）

	直牒洞横穴墓	赤羽 B1 横穴墓	比較
平面形状	逆台形	逆台形	同
奥壁の形状	側縁に膨らみを持つ台形	側縁に膨らみを持つ台形	同
立面形	台形型	台形型	同
天井形	平天井	平天井	同
棺座の有無	有り	有り	同
玄室長	5.77m	5.47m	0.3m
奥壁幅	3.99m	3.86m	0.13m
前壁幅	2.92m	2.29m	0.63m
天井高（奥壁部）	2.92m	3.00m	-0.08m
屍床高	約 30cm	30cm	0cm
羨道長	1.22m	1.15m	0.07m

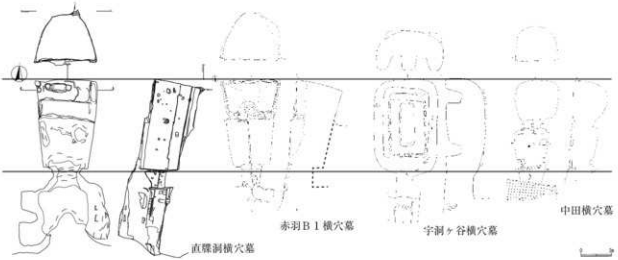
第 4-10 表　直牒洞横穴墓と日立市赤羽Ｂ１横穴墓

室の長さ 5.47 m、奥壁側幅 3.86 m、奥壁側高さ 3.00 m を測る。この規模は茨城県内の横穴墓では現在最大規模である。玄室構造は、平面形が逆台形を呈する。床面は、奥壁から 2.14 m のところに間仕切りが造られ、玄門側の床面から約 30cm 高く、屍床としている。奥壁形状は側縁にやや膨らみをもつ台形状である。立面形は台形型。天井は狭い平天井である。排水溝は屍床の周囲と玄室前側の中央部から羨道まで続く。床面には礫が敷かれている。

直牒洞横穴墓と赤羽Ｂ１横穴墓との構造と規模を比較したのが第 4-10 表である。この表からも２つの横穴墓が玄室の構造だけでなく、各部の規模も非常に類似していることが判る（第 4-18 図）。よって直牒洞中央窟は横穴墓を後世に改変したものと判断する。また、後述するが直牒洞横穴墓と赤羽Ｂ１横穴墓は関係性をもち、県内の横穴墓出現期に久慈川河口域と中流域に造営された大型横穴墓である可能性が高い（第 4-21 図）。

茨城県外の大型横穴墓との比較と類似点

ここでは参考に、茨城県外の大型横穴墓の例として、福島県中田横穴墓と静岡県宇洞ヶ谷横穴墓を提示する。



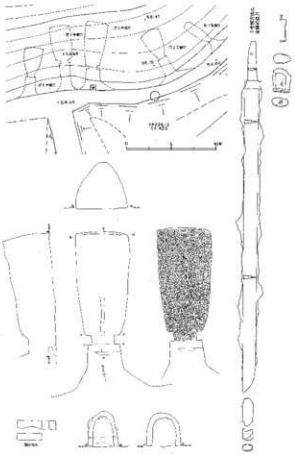
第 4-19 図　大型横穴墓の規格の類似（各報告書より転載、一部加筆）

中田横穴墓は、福島県いわき市に所在する。立地は滑津川河口の南で、太平洋から延びる丘陵の西側斜面に位置する。横穴墓の構造は、複室構造で、規模は全長 6.67 m、後室東西長 2.6 m、南北長 2.8 m、高 2.28 m を測る。装飾が後室にあり、赤と白２色で３段もしくは２段の三角文がみられる。副葬品には、金銅装大刀や馬具、鉄鏃等の武器、甲等の武具、銅鏡、土器などで、その内容や数の多さは、高塚墳を含めても地域で群を抜くものである。時期は、６世紀末ごろと推定される。

宇洞ヶ谷横穴墓は静岡県掛川市に所在する。逆川に沿った低い丘陵の基部に近い西斜面に単独で存在する。規模は、全長 8.5 ～ 8.6 m、玄室長 6.1 ～ 6.4 m、玄室最大幅 4.36 m、玄室天井高 2.55 ～ 2.6 m を測る。玄室の中央には巨大な棺が造り出されている。副葬品には鏡、ガラス玉、須恵器、馬具、金銅装大刀、刀子、鉄鏃など、非常に豪華な副葬品を有する。時期は６世紀後葉とされる。玄室規模や副葬品から、宇洞ヶ谷横穴墓は「（地域の）横穴式石室を規模で凌駕しており、遠江では横穴墓が最有力の墓制」とされる（大谷 2010）。

ここで玄室長に注目すると、宇洞ヶ谷横穴墓の玄室長は 6.1 ～ 6.4 m で、短長で比較すると直牒洞横穴墓や赤羽Ｂ１横穴墓と近い規模となる。また、中田横穴墓は前室と後室とに分かれるが、後室奥壁から羨門部端までが 6.67 m となり、この数値も近い規模となる（第 4-19 図）。この他にも東京都多摩ニュータウン遺跡 No.313 遺跡第１号横穴墓も類似する規模で、大型横穴墓の規模にこのような類似が見られる点について、ただの偶然と片付けず、今後の検討課題としたい。

直牒洞横穴墓の時期　直牒洞横穴墓の時期については、出土遺物が確認出来ないため、ほかの横穴墓からの比較を行うことで推定したい。まず、大型横穴墓の例では先に挙げた中田横穴墓や宇洞ヶ谷横穴墓は規模が巨大というほかに、非常に豪華な副葬品を伴う特徴がある。県内の大型横穴墓である赤羽Ｂ１横穴墓も同様に、冠の金銅製立飾り金具、金銅製耳環、琥珀製棗玉、水晶製切子玉、ガラス製丸玉・小玉、大刀、弓、鉄鏃、鉄鉾、挂甲、金銅製馬具など、非常に豪華な副葬品が出土している。横穴墓からの馬具の出土は、県内では唯一の事例となる。これらの副葬品から、横穴墓の時期は６世紀後葉とされている。



第4-20図　善光寺横穴墓群第３号横穴墓（（大森 1992）より転載）

直牒洞横穴墓のすぐ西側には善光寺横穴墓群が所在し、うち５基を発掘調査している（大森 1992）。横穴墓の構造は、平面形が細長い逆台形、立面形がアーチ型、床面には礫が敷かれている。副葬品で注目されるのは第３号墓から出土した金銅装の圭頭大刀である（第4-20図）。圭頭大刀は、片平雅俊によると茨城県内の墳墓で12例（善光寺３号墓、二ツ島横穴墓群、神岡字二ッ島、笠谷６号墳、磯前古墳、梶山古墳、伝玉里舟塚古墳、笄ヶ崎古墳、武者塚古墳、中台21号墳、山王塚古墳、寺山Ⅰ号墳）の出土があり、横穴墓からの出土は北茨城市二ツ島横穴墓群と善光寺横穴墓群の２例である。第３号墓の時期は大刀の年代から７世紀前葉と考える。

直牒洞横穴墓の時期については、赤羽Ｂ１横穴墓との玄室構造の類似から６世紀後葉と比定できる。これは善光寺３号墓の時期が７世紀前葉で、この横穴墓より以前に造られたであろうということはその巨大な構造から推測できることからも裏付けできる。また、副葬品については何一つわからないが、善光寺３号墳からの圭頭大刀の出土例からは、それと同様かもしくは先の３つの大型横穴墓と同じように高塚墳を圧倒するような豪華な副葬品を有していたことが推定できる。

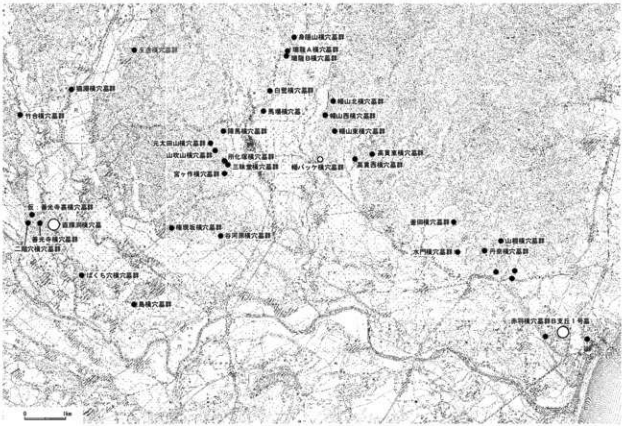
第２項　直牒洞横穴墓の重要性

(1) 常陸太田市の横穴墓

常陸太田市には30の横穴墓・横穴墓群が登録されている。判っている基数は614基あり（生田目 2010）、県内で最も横穴墓が集中している地域といえる。最近の分布調査では、直牒洞横穴墓の北側の丘陵斜面部にも多数の横穴墓があることが判っているので（仮称：善光寺裏横穴墓群）、今回報告の直牒洞横穴墓も含めると、群数も基数も増加することは確実である。分布は久慈川とその支流の里川、浅川、山田川に分布し、とくに里川流域に集中している（第4-21図）。

里川左岸に位置する幡バッケ横穴墓群では101基の横穴墓が確認されている。特徴としては横穴式石室の玄室形状と似た台形型の横穴墓が数基存在し、うち第６号墓は線刻による連続三角文をもつ装飾横穴墓である。第６号墓は装飾があるだけでなく、規模も大きく玄室長4.8 m、奥壁幅2.9 m、奥壁高1.8 mを測る。

幡バッケ横穴墓群の北側に位置する幡山東横穴墓群では55基の横穴墓が発掘調査されている。

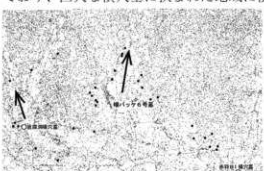


第4-21図　常陸太田市の横穴墓の分布図（大正7年5月30日発行　大日本帝国陸地測量図　1/25,000 地形図）

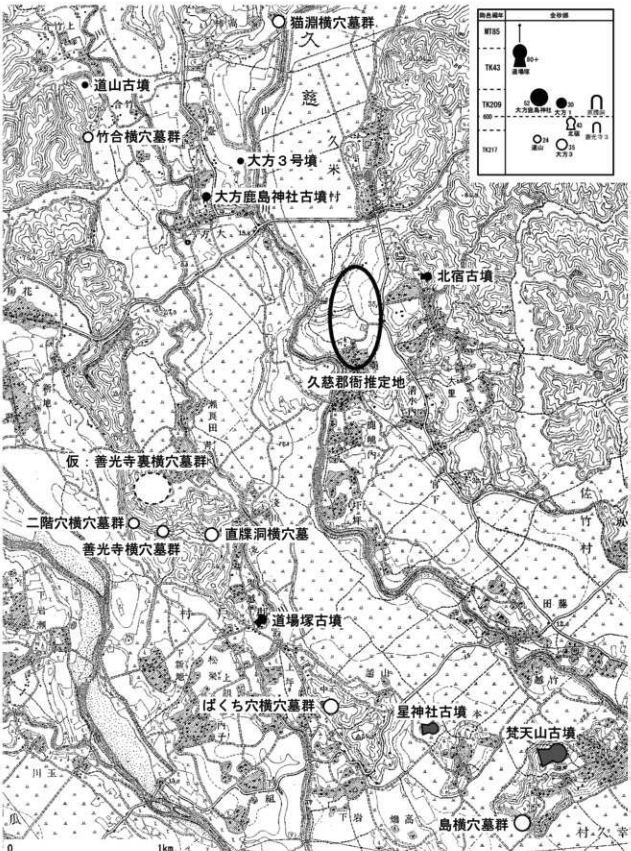
この横穴墓の台地上には幡山古墳群があり、横穴墓との関連がある。

里川右岸の身隠山横穴墓群では12基の横穴墓が発掘調査されている。第22号墓からは方頭把頭や鉄鏃、第20号墓からは直刀、円頭柄頭、鉄鏃、弓飾金具など、善光寺横穴墓群と同様に武器類の多さが注目される。

横穴墓が614基確認されているが、構造等詳細な情報がわかっているものは数例しかない。そんな状況であっても、直縣洞横穴墓が群を抜いて巨大な横穴墓であることは間違いない。そして第4-21図を見ると、直縣洞横穴墓の常陸太田市における位置は、久慈川流域のもっとも上流域に位置する横穴墓であることが判る。と同時に、赤羽B１横穴墓はそれと対極でもっとも下流域に位置しており、巨大な横穴墓に挟まれた地域に横穴墓が展開しているように見える。また、赤羽B１横穴墓は海上交通の要といえる河口域に位置し、直縣洞横穴墓は福島県白河市などを通じて中通り地域へのルートの入口部に位置することから、海上と陸上のそれぞれの入口を治めるように大型の横穴墓が配置されたとも考えられる。そうすると、もう一つの福島県へのルートの入口部となる場所にやや大型の横穴墓を有する幡バッケ横穴墓群第6号墓があることも偶然ではないだろう（第4-22図）。



第4-22図　北への玄関口に位置する大型横穴墓



第4-23図　直牒洞横穴墓周辺の主な関連遺跡と時期（大正７年５月30日発行　大日本帝国陸地測量図　1/25,000地形図、時期は（井2015）を参考に作成））

(2) 直縁洞横穴墓出現前後の周辺の様相

直縁洞横穴墓を6世紀後葉と考え、横穴墓周辺の6世紀後半から7世紀にかけての墳墓の状況をみて、直縁洞横穴墓について考えてみたい。

横穴墓周辺の6世紀後半から7世紀にかけての墳墓の状況については、井博幸の詳細な分析があるため、それに基づいて報告する（井2015）。

6世紀後半に比定できる古墳には、直縁洞横穴墓のすぐ南に位置する道場塚古墳がある。道場塚古墳は、墳丘が大きく削平されているが80 m以上の全長を誇る前方後円墳の可能性がある。そうであれば被葬者はこの時期の久慈川流域の最高首長と考えられている。次にそれに続く古墳としては、直縁洞横穴墓の北に位置する大方の古墳群が挙げられ、中でも大方鹿島神社古墳は当概期最大の直径52 mの円墳である。当概期に日立市西の妻古墳群第1号墳や水木古墳群第1号墳といった全長50 m規模の前方後円墳が久慈川河口域には存在するのに対して、同規模の円墳が道場塚古墳の後に造営されていることは注目される。7世紀に入ると大方から場所を変え、久慈郡衙推定地の近くに全長43 mの北宿古墳が造営される（第4-23図）。

(3) 直縁洞横穴墓の被葬者像

6世紀後半から7世紀前葉にかけての当該地域の古墳は、久慈川流域最高首長とされる道場塚古墳から大型円墳の大方鹿島神社古墳、そして中規模の北宿古墳といった移り変わりが見える。この高塚墳の前方後円墳から円墳へと移った時期に、道場塚古墳のすぐ近くに大型横穴墓の直縁洞横穴墓が出現してくるのである。

直縁洞横穴墓に類似する赤羽B1横穴墓は、支丘に1基だけという立地、規模が茨城県内最大級、冠金具といった非常に豪華な副葬品を有するといった特異な横穴墓であることが特徴であると指摘した。また構築された時期が、横穴墓といった墓制が茨城県内に導入された最初の時期であることも注目される。これらのことから、横穴墓の被葬者には墳丘を有する古墳に匹敵する有力豪族の姿が想像されるとともに、豪華な副葬品からはヤマト政権との強い関係性が窺える。同様に大型横穴墓の宇洞ヶ谷横穴墓の分析でも、東遠江では副葬品から宇洞ヶ谷横穴墓が当該地域の横穴式石室を有する古墳を圧倒し、横穴墓を最上位とする階層構造が想定されている（第4-24図）（鈴木2000、大谷2001）。また、林順は宇洞ヶ谷横穴墓について、直前の高塚古墳群との関係を重視し、「従来の墓制である高塚古墳群によって形成されていた階層構造が刷新され」、「横穴墓群の方が高塚古墳群よ

第4-24図　遠江地域の古墳と横穴墓の階層モデル（左図（大谷2001）・右図（鈴木2000）より転載）

りも卓越した階層性を帯びる」といった「墳墓の再編成」を示す墓であろうと指摘する（林 2020）。

直縣洞横穴墓の副葬品をもし赤羽Ｂ１横穴墓と同様と推測するのであれば、在地の最高首長とされる道場塚古墳のすぐ近くに、それに匹敵する階層の横穴墓が出現したとも考えられる。これは先述の林の宇洞ヶ谷横穴墓の指摘と共感する。そして横穴墓の被葬者には、ヤマト政権との強い関係性をもち、ヤマト政権の東北進出に関連して、交通の要衝を押さえる目的として活躍した新興の有力豪族の姿が想像される。このことは当該地域に位置する古墳時代前期前半の東国最大の前方後円墳である梵天山古墳や星神社古墳の出現理由とも似ていると考える。つまり、当該地域は古墳時代の「はじまり」と「終わり」にヤマト政権の政策が強く影響した地域と考えられるのである。さらに奈良時代には、直縣洞横穴墓の北東側に久慈郡衙が置かれることは、古墳時代以後もこの地の重要性を裏付ける事象であろう。

以上のように、直縣洞横穴墓について考察してみた。副葬品といった古墳時代に関する資料がない中での考察であるため、いささか理論の飛躍があるかもしれない。しかし、直縣洞横穴墓が大型横穴墓であるという事実からは、先述のような新しいこの地の古墳時代終末期の様相が浮かび上がることを考慮すると、直縣洞横穴墓の重要性を少しでも示せたのではないかと思う。結論として、直縣洞は平安時代以降の宗教施設として、直縣洞横穴墓は古墳時代終末期の墓として、二つの意味をもった重要遺跡であることは間違いない。

本報告を行うに際して、ご指導やご助言をいただきました梅田由子氏、片平雅俊氏、小山侑里子氏、鈴木裕芳氏、田中美零氏、山口憲一氏、三井猛氏に末筆ながら感謝申し上げます。

参考・引用文献

井 博幸　2015 「久慈川中流域の首長墓Ⅱ－常陸太田市大方・大里地区を中心に－」『茨城県考古学協会誌』第 27 号　茨城県考古学協会　23-70 頁

大谷純仁ほか　1971 「掛川市宇洞ヶ谷横穴墳発掘調査報告」静岡県文化財調査報告書第 10 集　静岡県教育委員会編

大谷宏治　2001 「古墳時代後期の階層構造からみた遠江・駿河の横穴墓」『東海の横穴墓』静岡県考古学会 2000 年度シンポジウム　静岡県考古学会シンポジウム実行委員会　98-110 頁

大谷宏治　2010 「東海東部の横穴墓と古墳－遠江地域を中心として－」『第 15 回東北・関東前方後円墳研究会大会　シンポジウム横穴墓と古墳　発表要旨資料』東北・関東前方後円墳研究会　199-222 頁

大森信英　1992 『善光寺横穴群発掘調査報告書』金砂郷村教育委員会・善光寺横穴群発掘調査会

鈴木一有　2000 「遠江平塚古墳の研究　考察・結語」『静岡県考古学研究』32　静岡県考古学会　111-127 頁

鈴木裕芳　1987 『赤羽横穴墓群　Ｂ支丘１号墓の調査』日立市教育委員会

生田目和利　2010 「茨城県の横穴墓と古墳」『第 15 回東北・関東前方後円墳研究会大会　シンポジウム横穴墓と古墳　発表要旨資料』東北・関東前方後円墳研究会　59-85 頁

生田目和利　2020 「日立市域の古墳群と横穴墓群」『続　常陸の古墳群』明治大学文学部考古学研究室　57-96 頁

林 順　2020 「静岡県域における横穴墓群の埋葬原理－群構成・階層性の側面から－」『名古屋大学人文学フォーラム』３　名古屋大学大学院人文学研究科図書・論集委員会　113－128 頁

渡辺一雄ほか　1971 『いわき市史・別巻　中田装飾横穴』いわき市史編さん委員会

第４節　直牒洞阿弥陀三尊の製作年代とその背景

瀬谷貴之（神奈川県立金沢文庫）

第１項　はじめに

直牒洞は、現在まで続く浄土宗の基礎を形作った浄土宗七祖聖冏（興国２年･1341～応永27年･1420）が、上杉禅秀の乱（応永23年・1416）の影響で瓜連が荒廃したため、活動の拠点であった常福寺から逃れて著作活動を行った場所と伝承される。その後、聖冏の弟子であった常福寺三世の了智により、直牒洞の傍に香仙寺が建立され聖冏ゆかりの聖蹟となり、昭和45年には茨城県指定の史跡とされた。しかし今日では、直牒洞は聖冏生存中より約700年以上は遡る古墳時代末期から奈良時代の大型横穴墓の奥壁に、阿弥陀三尊像を彫り出して改変した石窟であることが明らかである。本報告書や関連する光学・計測調査などでも、古代横穴墓として再評価と価値づけが課題といえよう。しかし直牒洞を歴史的に評価する場合、古代の大型横穴墓や、聖冏ゆかりの史跡としての価値づけとともに、奥壁に大きく彫り出された阿弥陀三尊像の製作年代や仏教美術史的評価は、それが直牒洞の主題でもあるため欠かせないものといえよう。ここでは直牒洞阿弥陀三尊像について、製作年代と造像背景の問題を中心に仏教美術史研究の視点から再検討を行ってみたい。

第２項　直牒洞阿弥陀三尊像と東国における摩崖仏・石窟仏との作例との比較検討

日本彫刻史研究は、古代・中世の作例が木彫仏や金銅仏が圧倒的に多いため、それに比して石仏の研究は少ない。例えば近世以降の作品は、信仰や金石文という側面から民俗学や歴史研究に委ねられ、また古代・中世の作品についても、多くの研究者により本格的な研究が行われているとは言い難いのが実情である。直牒洞阿弥陀三尊像についても本格的に扱った研究は少ない（註１）。それでも古代・中世の石仏研究については、その作行や規模から国宝の臼杵磨崖仏を中心に行われ、また畿内の作例を中心とする川勝政太郎氏による数多くの業績も知られる。そして直牒洞阿弥陀三尊像を再検討するにあたって参考となるが、東国でも特に南東北から北関東に展開した、大谷磨崖仏（栃木県宇都宮市、国指定特別史跡・重要文化財）や大悲山石仏（福島県南相馬市、国史跡）をはじめとする磨崖仏や石窟仏の作例だろう。以下、直牒洞阿弥陀三尊像との関係で注目される東国の磨崖仏や石窟仏の作例と概容について紹介し、その比較検討を行ってみよう（註２）。

①大谷磨崖仏（栃木県宇都宮市、国指定特別史跡・国指定重要文化財）（第4-25図、第4-26図）

大谷磨崖仏は、東国に残る作例では規模も大きく、火災によって損傷するものの保存状態も比較的良い。また坂東三十三観音の札所（十九番）でもあり、東国を代表する石仏として知られる。いわゆる「大谷石」と称される軟質の凝灰岩の大きな岩除に、千手観音立像、伝釈迦三尊像、伝薬師三尊像、伝阿弥陀三尊像の合計11軀が、岩肌に沿ってやや前傾しながら、ほぼ半肉彫りであらわされる。主尊である千手観音立像が一番古く、奈良時代末期から平安時代初期のもので、その他のものが平安時代前期から鎌倉時代に追刻されたという説がある。一方で、すべてが平安時代後期以降の製作とする説もあり、製作年代は確定しているとは言い難い。千手観音の面貌や脇手などの細部の仕上げは塑土を用いて石心塑造とする。その作風とともに古代的技法が採用されており、製作

年代も相当遡る可能性は高い。

②大悲山石仏 (福島県南相馬市、国指定史跡）（第 4-27 図、第 4-28 図、第 4-29 図）

福島県浜通りの旧小高町の丘陵部に所在し、凝灰岩質の岩窟に彫り出される。薬師堂石仏、観音堂石仏、阿弥陀堂石仏と称される近接する三か所からなるが、観音堂と阿弥陀堂の石仏は、剥落などにより摩滅して保存状態が悪い。薬師堂石仏は間口約 14 メートルに及び、如来坐像三軀を中心に、両脇に菩薩立像、右手に如来坐像と菩薩立像の合計七軀の大きな仏像が彫り出される。如来像は頭部や両膝前も含めてほとんど立体的に彫り出され、頭部は大きいながらも体部に対してのバランスも良く、また平安初期彫刻にも通じる太い体躯が表現されている。菩薩立像は両脇の天衣が体側に沿って大きくハの字状に開き、古代金銅仏のような表現もみられる。菩薩像の宝珠形の頭光や、如来像のバルメット文も見られる光背は、飛鳥、奈良時代風で大変古様な表現である。しかし、造立年代については平安時代後期とする説がある（註３）。その一方、様式や意匠を素直に解釈することが許されるのならば、平安時代初期以前の製作である可能性も充分にあるだろう（註４）。

③吉名岩屋堂磨崖仏及び横穴墓（福島県南相馬市）（第 4-30 図）

大悲山石仏近くに所在し、同文化圏において製作されたものだろう。同じ壁面には横穴墓が彫り出され、磨崖仏は横穴墓を拡張、改変したもの。如来坐像を中心に両脇に菩薩立像が彫り出されて、三尊形式となる。如来坐像は大悲山の薬師堂石仏と同様に膝前まで立体的に彫り出しており、製作年代も平安時代以前に遡る。

④塩崎岩屋堂磨崖仏（福島県南相馬市）（第 4-31 図、第 4-32 図）

吉名岩屋堂磨崖仏と同様、大悲山石仏近くに所在する。凝灰岩の岩肌に千手観音坐像を中心に、薬師三尊、阿弥陀如来、観音菩薩、地蔵菩薩、二天像など確認されるが、薄い半肉彫りで摩滅により確認できない部分もある。大悲山薬師堂や吉名岩屋堂の石仏よりはかなり製作年代は下り、如来像の耳上の地髪の左右が張り出し、髪際が浅いM字形のカーブを描く頭部の形式には宋風受容がみられ、鎌倉時代彫刻の特色が顕著である。。

⑤和田大仏及び横穴墓群（福島県須賀川市）（第 4-33 図、第 4-34 図）

福島県中通り中部の須賀川市の、阿武隈川を望む南向斜面の岩肌に所在する。その左右には横穴墓が多数あり、中央部に一際大きく約四メートル近い如来像が彫出される。ただし体部は剥落や摩滅により保存状態が悪い。一方、頭部は比較的保存状態が良く、大悲山薬師堂の如来像よりはやや平板ながらも立体的に彫り出され、造像年代も平安時代以前に遡るとみられる。左右に彫り出される横穴墓の奥壁には、定印の阿弥陀如来坐像がレリーフ状に複数彫られており、同じ印相の直牒洞阿弥陀三尊との関係でも注目される。

⑥舘ヶ岡磨崖仏（福島県須賀川市）（第 4-35 図）

須賀川市舘ヶ岡の滑川沿いの丘陵岩肌に所在する。二メートルを超える定印の阿弥陀如来像で、硬質の安山岩にレリーフ状に彫り出される。鼻先や脚部に一部欠損がみられるものの、彫り出された岩が硬質のため保存状態は良い。頭体のバランスも自然で、頭部の耳上の地髪が左右に張るのは明らかに鎌倉時代以降の様式で、製作年代も鎌倉時代後期頃かと思われる。その大きさと定印を結ぶ図像は直牒洞阿弥陀如来とは共通するものの、様式については大分異なった趣を示す。

⑦久保磨崖仏（福島県いわき市） 令和元年８月に山崩れにより滅失 **（第 4-36 図）**

いわき市鹿島町久保の鹿島街道に面して突出した岩塊に、仏龕を掘り窪めて中に彫り出された如来坐像。仏龕と如来坐像を安置するものが二カ所残存し、後に石仏部分だけが切り出されたものが二軀別置されており、合計四軀が確認される。頭部はほぼ丸彫りに近く、体部も立体的である。鎌倉時代の製作とされるが、大悲山石仏の系譜に連なる立体的な石仏とみられよう。製作年代ももっと遡る可能性もある。なお、その近くには久保横穴墓が所在する。

⑧住吉遍照院磨崖仏（福島県いわき市）（第 4-37 図）

いわき市小名浜住吉の遍照院裏山の崖に所在する。久保磨崖仏と同様に岩肌に仏龕を掘り窪めて、中に如来坐像を安置する。現状三カ所に如来坐像が残存し、このうち中尊が定印を結ぶ阿弥陀如来で両脇侍を伴うものが、最も保存状態が良い。その螺髪は細かく粒状に刻まれたものが残り、頭部は丸く張りがあり、平安時代後期の作風を示す。

⑨東光寺遺跡（石窟仏）（宮城県仙台市宮城野区）

仙台市宮城野区岩切の東光寺境内地に所在する。北七田川を望む丘陵の南端の岩肌に彫り出された横穴墓を改変して、壁面に定印の阿弥陀如来や、両掌上に薬壺を乗せた薬師如来などが彫り出される。左右壁面やその近くには横穴墓や中世の板碑が多数あり、その場所が古代から中世にかけての大きな霊場であったこと知られる。製作年代は比較的バランスのとれた写実的ともみられる体躯などから、板碑群と同じく鎌倉時代頃かとみられる。

⑩田沢磨崖仏（岩地蔵）（宮城県亘理町）

阿武隈川南岸に位置する岩塊に彫り出された横穴墓を改変して、鎌倉時代以降に流布する図像の、片脚を踏み下げる地蔵菩薩が安置される。現状、四窟、四軀が確認され、近くには板碑も刻まれる。同所は稲葉の渡しといわれる阿武隈川を渡る交通の要所であった。

⑪壁面観世音（十一面観音坐像）（茨城県城里町）

直牒洞阿弥陀三尊像に、最も近い場所に所在する中世以前に遡る磨崖仏。丘陵端の南面する大きな岩肌を比較的深く掘り窪めて仏龕として、ほぼ等身大の十一面観音坐像を安置する。ほとんど丸彫りされる頭部は、頭上面も確認できるなど比較的保存状態も良いが、体部は摩滅している。徳一開基の伝承を伴うが、鎌倉時代頃のものとみられる。

以上、直牒洞阿弥陀三尊像を検討するにあたり、参考となる東日本に分布する磨崖仏や石窟仏について紹介し、概観した。ここでこれらの事例と直牒洞阿弥陀三尊像の位置づけを、年代、分布、技法、製作背景などにつて比較検討してみたい。

年代

各磨崖仏や石窟仏の年代については、それぞれの事例についての研究が、そもそも数少ないこともあり、詳細な年代が確定しているとは言い難い。例えばもっとも初期のもので、規模も大きい大谷磨崖仏や大悲山石仏の推定される年代は、奈良時代から平安時代後期まで数百年の開きがある。そして基準作例となるべきものが確定していないため、たとえば大悲山石仏の系譜に連なると思われる福島県浜通りや、中通り北部の作例についても、鎌倉時代と推定される場合があるが、和田大

仏など平安時代もかなり遡る可能性は充分にあるだろう。ただし、図像的にいわゆる宋風が受容された鎌倉時代彫刻の要素を含むもの、例えば塩崎岩屋堂磨崖仏、東光寺遺跡、舘ヶ岡磨崖仏については、鎌倉時代以前に年代が遡る可能性は低い。これらの作例と比較して直牒洞阿弥陀三尊像には、全く宋風に基づく鎌倉彫刻的要素は見られないことは留意されるが、その年代を導くのは難しい状況といえよう。

分布

作例の分布は、地方別におおよそ以下の通りになる。福島県浜通り北部を中心にした作例（大悲山石仏、吉名岩屋堂磨崖仏、塩崎岩屋堂磨崖仏など）、福島県浜通り南部を中心にした作例（久保磨崖仏、住吉遍照院磨崖仏）（註５）、福島県中通り中部を中心にした作例（和田大仏及び横穴墓群、舘ヶ岡磨崖仏）、宮城県南部の作例（東光寺遺跡、田沢磨崖仏）（註６）、栃木県中部（大谷磨崖仏）、茨城県北部の作例（直牒洞、壁面十一面観音）に大別されるだろう。しかし大悲山石仏の影響は最も大きく、おそらくは浜通り北部から南部、中通り北部の作例に影響を与えた可能性が高い。直牒洞阿弥陀三尊像の所在場所は、これらのうち福島県浜通り南部、および栃木県中部の大谷磨崖仏の影響を受けた可能性があるだろう。

技法

技法的にはほぼ頭部や膝前などの体軀を立体的に彫り出すもの（大悲山石仏など）、半立体的に彫り出すもの（大谷磨崖仏）、薄くレリーフ状であらわすもの（塩崎岩屋堂磨崖仏、舘ヶ岡磨崖仏）に大別できるが、大悲山石仏をはじめとする軟質の凝灰岩の壁面には立体的にあらわされ、凝灰岩質でなない硬質な安産岩系の舘ヶ岡磨崖仏は、おのずと薄くレリーフ状にあらわされるなど、石質と技法は密接な関係にあると言えよう。また大谷磨崖仏や大悲山石仏は面貌などの細部は、塑土で塑形されて石心塑造の技法が行われている可能性が指摘される（註７）。直牒洞阿弥陀三尊像はレリーフ状で、塩崎岩屋堂磨崖仏や舘ヶ岡磨崖仏に近いが、前述のように、これらに顕著な鎌倉彫刻的要素が全くみられない。直牒洞阿弥陀三尊像が比較的薄いレリーフ状なのは、その石質や製作工房の技術的問題（立体的に彫り出す技術を伴わないなど）を含んでいる可能性があるだろう。

製作背景―古代横穴墓との関係―

製作背景で注目されることに、直牒洞阿弥陀三尊像は古代大型横穴墓の奥壁を改変して転用、成立した石窟だが、これは直牒洞阿弥陀三尊像に限らず、和田大仏をはじめ他の磨崖仏や石窟仏についても同様に横穴墓を改変したものが多い。これはすでに終末期の古墳と寺院との関係で指摘されるように、古代祭祀の対象が古墳から寺院への転換を示すものと軌を一にするものと言えよう。例えば、日本最初の本格的寺院であった飛鳥寺塔心礎の鎮壇具は、玉類、金鎖、刀子、馬鈴、挂甲など古墳から出土する遺品と共通することが知られている。このように古墳から寺院へ、古代において有力者の祭祀施設の転換が行われた。地方においても国造や郡司層の古墳や古墳群から、郡寺などの古代寺院へと転換したことも同様である。おそらく横穴墓についても、祭祀の中心であった在地の有力者や仏教関係者により、意図的・意志的な転用、改変が行われ磨崖仏や石窟仏となったとみられる。そして横穴墓の衰退期から暫時、磨崖仏や石窟仏への改変が行われたとみれば、大悲山石仏や大谷磨崖仏など初期の磨崖仏や石窟仏の製作工房は、横穴墓の製作工房が引続き行った可能

性もあるだろう。

以上、東日本において展開した磨崖仏や石窟仏を概観して、直牒洞阿弥陀三尊像との比較検討を試みた。結果として大型の古代横穴墓を改変して成立した直牒洞阿弥陀三尊像は、東日本で展開した磨崖仏や石窟仏から宗教的環境においては孤立したものではないことを確認出来た。しかし、直牒洞阿弥陀三尊像の造立年代については、比較すべき各作例が奈良時代末期から鎌倉時代まで年代に幅があること、また個別の作例でも年代について諸説ある場合があることなどから、導くことは難しい。また技術的なものや作風については、直牒洞阿弥陀三尊像は独自の展開を遂げたものとみられる。

第３項　直牒洞阿弥陀三尊像の仏像としての製作年代

直牒洞阿弥陀三尊については、東日本（南東北から北関東）に展開した磨崖仏や石窟仏の作例との比較は不可欠なのものだが、しかしその製作年代の比較は難しい。なぜなら比較するべき個別の作例の年代自体が、確定しているとは言い難いからである。次に直牒洞阿弥陀三尊像の製作年代を考えるため、有効であると思われる木彫仏を含めた仏像との比較・検討を行って、その日本彫刻史における位置づけをこころみたい。

定印の阿弥陀如来

直牒洞阿弥陀三尊は、腹前で定印を結ぶ阿弥陀如来坐像を中尊とし、観音・勢至菩薩とみられる両脇侍は立像形式となる。中尊が坐像で両脇侍が立像形式となるものは、法隆寺の橘夫人厨子の阿弥陀三尊をはじめとして飛鳥時代後期までその作例は遡る。ただし中尊阿弥陀如来が定印を結ぶものは飛鳥、奈良時代には確認されていない。中尊阿弥陀如来が定印を結ぶものは仁和四年（888）に造立された仁和寺阿弥陀三尊像を最も古い作例とする（脇侍は立像形式）。定印は精神を集中する印契で、この阿弥陀如来の形式は、両界曼荼羅中にみられ本来は密教系のものである。そのため平安時代に入り、弘法大師空海らにより密教が請来されなければ、あらわれない印相でもある。その一方、阿弥陀如来に極楽往生を願う浄土教においても、阿弥陀如来が定印を結ぶ形式は、平等院鳳凰堂阿弥陀如来坐像をはじめ取り入れられて普及した。しかし平安時代後期の 12 世紀以降となると、来迎印を結ぶ阿弥陀如来像が主流となることが知られている。この点、直牒洞の阿弥陀如来の印相は浄土系の阿弥陀如来としては、古式に沿ったものと言えよう。おそらく念仏聖をはじめとした僧侶達は、石窟である直牒洞に籠って定印の阿弥陀如来坐像と対峙することにより、極楽往生を念じ願ったものとみられる。中尊が定印を結び、両脇侍が立像となる直牒洞阿弥陀三尊の図像形式は、平安時代時代中期的なものと言えよう。

平安時代前・中期彫刻彫刻との比較

直牒洞阿弥陀三尊の様式的特徴を、今回の光学・計測調査の結果や目視を前提としながら、他の彫刻作品と比較検討をしてみたい（註８）。まず直牒洞阿弥陀三尊のうち中尊阿弥陀如来坐像は、肉髻や地髪、両耳のボリューム感が強調された大きな頭部が特徴と言えよう。さらに、その頭部を支える両肩と厚みのある両膝前は左右に張り、三角形状の太い体躯を表現するのが特徴的である。また右膝前の弧を描く衣文や左袖の衣文には、平安時代前中期の彫刻にみられる衣文を立体的にあ

らわす技法である、翻波式衣文のような部分も見受けられる。そして左肩の衣文は、向かって右から斜めに深く刻まれる。左肩の衣文は、一般に平安時代後期以降の如来像では、体躯に沿って上方から直線状に浅くあらわされるものが主流となる。すなわち左肩に斜めに衣文があらわされるのは、平安時代前中期的なものと言える。直牒洞阿弥陀如来像の様式的特徴は、総体的に平安時代前中期頃に当てはめることができよう。そしてさらに注意したいのは、平安時代後期、11 世紀から 12 世紀に日本全国各地に広まった、穏やかで整理されたいわゆる定朝様的な要素（第 4-38 図）が全く見られないことだろう。例えば同じ茨城県に伝来する、西蓮寺薬師如来坐像（第 4-39 図）は参考となる。西蓮寺薬師如来坐像は平安時代、11 世紀に遡る可能性もあるが（註９）、体躯の比率は直牒洞阿弥陀如来と同様に、大きな頭部とがっしりと太い体躯となる。しかしその穏やかな面貌や浅く整理された衣文など、穏健な作風は定朝様を前提とするものであることも明らかである。定朝様の要素が全く伺えない直牒洞阿弥陀如来の様式とは一線を画すものといえよう。

一方、直牒洞阿弥陀如来像の両脇侍像については、こちらも比較的頭部を大きめにあらわし、体躯は太くわずかに外側に腰をひねるようにみえる。この頭体の比率は阿弥陀如来と同じく、頭を小さくする平安時代後期の定朝様の菩薩像とは一線を画し（第 4-40 図）、平安時代前中期的なものである。また左右側頭部から下がる冠繒や、両肩から体側にかかる帯状の条帛は太めで、これも古様である。そして最も特徴的なのは、頭に頂く冠を筒状にあらわすことだろう。これは大阪・観心寺の菩薩立像など、平安時代前期の菩薩像に特徴的なものであることが指摘されている。

これら直牒洞阿弥陀三尊の平安時代前期または中期の様式に近い作例として、東国においては、平安時代前期、9 世紀末から 10 世紀初頭の造像と推定される山梨・大善寺の薬師三尊像（第 4-41 図、第 4-42 図、第 4-43 図）が挙げられるだろう。また大きな頭に太い体躯をあらわすものでは、やはり大善寺と同じころと推定される静岡（伊豆）・南禅寺の薬師如来坐像（第 4-44 図）が挙げられようか。そして近似性が最も注目される作品として、その伝来は不明ながら、近年奈良国立博物館に収蔵された平安時代前期（９世紀）とされる阿弥陀如来坐像（第 4-45 図）がある（註 10）。同像の大きな頭と三角形状のがっしりとした太い体躯、さらに定印を結ぶ印相、地方作であるためなのか独特の稚拙感または異相も参考となる。すなわち様式的には、奈良国立博物館阿弥陀如来坐像の延長線上に、直牒洞阿弥陀如来は位置づけられるかも知れない。なお奈良国立博物館像と同様に、肉髻や地髪のボリュームを増して、頭部を大きくあらわす定印の阿弥陀如来坐像に、やはり近年、九州国立博物館が収蔵したものや、滋賀県大津市の法光寺所蔵のものがある（いずれも 10 世紀）（註 11）。法光寺像の存在は、この形式が天台系である可能性も示唆しており参考となる。

第４項　まとめ

以上、直牒洞阿弥陀三尊像について、東日本に展開した磨崖仏や石窟仏の事例、さらには木彫の他の仏像との関係について、比較検討を行った。おおよそ、このことから導かれる直牒洞阿弥陀三尊像の造立年代は平安時代中期、10 世紀前後が想定されよう。常陸国・茨城県の地方性と保守性を考慮すれば 10 世紀後半から 11 世紀初期、より率直に図像的に解釈すれば 10 世紀前半にも位置付けられようか。また東日本に展開する磨崖仏や石窟仏との関係では、横穴墓を改変するという宗

教的環境は共通するものの、これらの事例では尊像が立体的なものが多く、レリーフ状の直牒洞阿弥陀三尊像とは大分異なったものであった。おそらく歴史・文化的には、先行するとみられる福島県浜通りや、中通りの磨崖仏や石窟仏、栃木県の大谷磨崖仏の影響は受けつつも、製作工房などは独自のものだったとみられる。

最後に直牒洞阿弥陀三尊像の宗教的な位置づけについて検討したい。直牒洞は、最初、古代横穴墓として成立し、周辺の横穴墓とともに墓群を形成したものとみられる。その後、平安時代中期に東国や常陸国北部に、おそらく天台系の浄土信仰が流入すると、念仏聖などの僧侶達が修行する場所として、一番大きな横穴墓の奥壁に阿弥陀三尊が彫り出されて石窟に改変された。そして前方に広がる久慈川水系に至る湿地帯は、浄土庭園に見立てられるようになったのだろう。現在、隣接する香仙寺本堂に安置される阿弥陀三尊像の中尊阿弥陀如来立像は、現状表面が修理により後補の金泥で覆われるが、典型的な平安時代後期、12 世紀の様式を示す。本像が当初から直牒洞周辺に伝来したのならば、直牒洞は平安時代を通して浄土信仰の場所とされたのだろう。そして直牒洞室内の左右壁面には、多数の五輪塔が追刻され、納骨穴の可能性がある小穴も複数個所確認される。これは中世にいたっても直牒洞が、浄土信仰の霊場として機能し多くの結縁者を得ていたことが知られる。また、これを裏付けるように直牒洞あたりはかつて新善光寺と呼ばれており、中世においても盛んに善光寺聖なども往来し、浄土信仰の霊所とされていたのだろう。なお、現在、石岡市万福寺には永仁三年（1295）銘の善光寺式阿弥陀三尊像（第 4-46 図）が伝来するが、同像はかつて直牒洞に近い額田郷北酒出村（現那珂市）において造立されものという近世の縁起が残る（註 12）。これを信じることが許されるのならば、久慈川周辺において善光寺信仰が直牒洞も含めて、盛んと行われていたのかも知れない。以上のように平安時代中期の石窟としての成立以来、直牒洞は阿弥陀浄土信仰の場所であり、そこに室町時代初期に至り、浄土宗七祖の聖冏が入ることは当然の帰結でもあった。あるいは当時高齢であった聖冏の隠棲場所として直牒洞は選ばれたのであって、結果的に上杉秀禅の乱から逃れたようなかたちになったのかも知れない。いずれにせよ直牒洞は、大型横穴墓や聖冏ゆかりの遺跡としての価値に加え、東国の浄土信仰や霊場の実態を知る貴重な複合遺跡として大いに評価されよう。

註

(1) 中村進「常陸香仙寺石窟仏について」（『史迹と美術』463、昭和 51 年）。同論は、直牒洞を平面図や立面図を含めて、詳しく紹介した唯一のものとみられる。

(2) 青木淳・大屋孝雄『福島の磨崖仏、鎮魂の旅へ』（平成 29 年、淡交社）。同書は、福島県内に多数存在する磨崖仏や石窟仏について、古代から近世まで詳しく報告する。本報告でも、多く参考とした。

(3) 亀田孜「東北の石佛」（『仏教芸術』30、昭和 31 年、『日本仏教美術史叙説』所収、昭和 45 年、學藝書林）。

(4) 青木淳「南相馬・大悲山磨崖仏と渡来文化―みちのくの「鎮魂」とその歴史的な連続面―」（前掲註（2）参考文献所収）及び若林繁「仏教美術史からみた大悲山石仏」（『平成二十八年二月二十一日開催　大悲山石仏復旧記念特別講演会講演録』所収、令和 2 年、南相馬市教育委員会文化財課）。

(5) 浜通り南部にはこの他にも、中世以前に遡る可能性がある磨崖仏や石窟仏として剥落や摩滅が激しいものの、日渡の大仏、清水の地蔵菩薩像磨崖仏、馬落の磨崖仏、真福寺磨崖仏、下山口薬師三尊磨崖仏などが確認される（前掲註（2）青木・大屋参考文献参照）。

(6) 宮城県内にはこの他にも、富沢磨崖仏群が鎌倉時代に遡るものとみられる。

(7) 前傾註（4）青木参考文献。

(8) 令和2年11月22日に直牒洞及び香仙寺において、奥健夫、川瀬由照、郡政人、行方敬太郎、三橋由吾の各氏及び山口憲一氏（常陸太田市教育委員会）、三井猛、梅田由子の各氏（（有）三井考測）のご協力を得て確認調査を行った。本報告書における年代や様式に関する知見は、その時の協議の結果による。
(9) 後藤道雄『茨城彫刻史研究』（平成14年、中央公論美術出版）。
(10) 奈良国立博物館編『なら仏像館　名品図録　2016』（平成28年）。
(11) 大津市歴史博物館編『阿弥陀さま―極楽浄土への誓い―』（平成24年）。
(12) 前掲（9）後藤参考文献。
参考図版（複写）の出典は次の通り。
第1図、第2図、第17図、第18図、第19図、第20図：久野健編『仏像集成』1「日本の仏像〈関東・東北・北海道〉」（平成元年、学生社）。
第3図～第13図：青木淳・大屋孝雄『福島の磨崖仏、鎮魂の旅へ』（平成29年、淡交社）。
第14図、第15図、第16図、第22図：後藤道雄『茨城彫刻史研究』（平成14年、中央公論美術出版）。
第21図：奈良国立博物館編『なら仏像館　名品図録　2016』（平成28年）。

第4-25図　大谷磨崖仏 千手観音立像
平安時代初期　栃木県宇都宮市

第4-26図　大谷磨崖仏　伝釈迦三尊像
平安時代前期　栃木県宇都宮市

第4-27図　大悲山石仏（薬師堂）
如来坐像　平安時代初期
福島県南相馬市

第4-28図　大悲山石仏（薬師堂）
菩薩立像　平安時代初期
福島県南相馬市

第4-29図　大悲山石仏　薬師堂内部
平安時代初期　福島県南相馬市

第 4-30 図　吉名岩屋堂磨崖仏及び横穴墓　平安時代　福島県南相馬市

第 4-31 図　塩崎岩屋堂磨崖仏　鎌倉時代　千手観音像　福島県南相馬市

第 4-32 図　塩崎岩屋堂磨崖仏　鎌倉時代　薬師如来像　福島県南相馬市

第 4-33 図　和田大仏及び横穴墓群　大仏部分　平安時代　福島県須賀川市

第 4-34 図　和田大仏及び横穴墓群　横穴墓部分　平安時代　福島県須賀川市

第 4-35 図　舘ヶ岡磨崖仏　鎌倉時代　福島県須賀川市

第 4-36 図　久保磨崖仏　平安時代　福島県いわき市

第 4-37 図　住吉遍照院磨崖仏　平安時代後期　福島県いわき市

第 4-38 図　阿弥陀如来坐像　平安時代後期　祥光寺所蔵（茨城県）

第 4-39 図　薬師如来坐像
平安時代後期　西蓮寺所蔵（茨城県）

第 4-40 図　菩薩立像
平安時代後期 大楽寺所蔵（茨城県）

第 4-41 図　伝月光菩薩立像
平安時代前期 大善寺所蔵（山梨県）

第 4-42 図　薬師如来坐像
平安時代前期　大善寺所蔵（山梨県）

第 4-43 図　伝日光菩薩立像
平安時代前期 大善寺所蔵（山梨県）

第 4-44 図　薬師如来坐像
平安時代前期
南禅寺所蔵（静岡県）

第 4-45 図　阿弥陀如来坐像
平安時代前期　奈良国立博物館所蔵

第 4-46 図　阿弥陀三尊像（善光寺式）
永仁三年（1295）
万福寺所蔵（茨城県）

第５節　了誉聖冏上人と直牒洞

鈴木英之（北海学園大学）

第１項　はじめに

文政・天保年間（1818-1844）頃に、浄土僧・摂門が編纂した『瓜連常福寺志』では、直牒洞を有する常不軽山荘厳院香仙寺の由来について次のように記されている。

> 同　川島村阿弥陀山とも
> 常不軽山荘厳院香仙寺
> 開山本山第三世明誉了智永享四壬子十二月開創寺。傍有一洞窟之裡岩壁弥陀三尊座像自然に押絵之如く出現す。故に阿弥陀山といふ。世に伝ふ佐竹義秀兵乱之時、瓜連久慈士庶悉く北ケ去、聖冏禅師も草地山を道て此窟中へ蟄居、直牒十巻を著述。爾時、常不軽菩薩来現光照了誉製述之筆以故改山号。（註１）

香仙寺は、永享四年（1432）に瓜連常福寺三世の明誉了智上人によって開創された。香仙寺そばの洞窟の奥壁には、阿弥陀三尊の座像が自然と押し絵のように出現した。だから山号を「阿弥陀山」という。さらに佐竹義秀の乱によって瓜連が混乱した際に、瓜連常福寺の了誉聖冏上人（以下、敬称略）がこの洞窟へ避難し、『決疑鈔直牒』を著述した。その時、常不軽菩薩が出現し、聖冏の著述を光り照らしたことから「常不軽山」と山号を改めたのだという。

常不軽菩薩は『法華経』に登場する菩薩のひとりで、厳しい迫害を受けながら真実の法を広め伝えたことで知られる。常不軽菩薩が聖冏の著作にお墨付きを与えたことは、聖冏も菩薩同様に苦難に耐えて真実の法を伝えたことを意味する。戦乱により避難生活を送る聖冏の苦境を常不軽菩薩の苦難に照らし合わせているのである。このように香仙寺は、その成り立ちから聖冏をめぐる伝説と深く結びついていることがわかる。

冒頭の『瓜連常福寺志』で述べられるように、実際に香仙寺の傍らにある洞窟の奥壁には平安様式の阿弥陀三尊の磨崖仏が存し、押し絵のように浮き彫りされている。直牒洞は、もとは横穴式墳墓であり、近年の調査では、壁には灯りをとった痕跡が発見された。壁には阿弥陀三尊の他にも五輪塔が多数掘られるなど、地域の宗教施設としての役割をもっていたことが知られる。聖冏が洞窟内で著述したとされる『決疑鈔直牒』にちなんで、現在この巌窟は「直牒洞」と呼ばれている。

直牒洞に蟄居した了誉聖冏（1341-1420）は、浄土宗第七祖・浄土宗中興の祖と称される学僧である。瓜連常福寺を本拠として、当時低迷していた浄土宗の地位を向上させるため、教学や教団制度の整備を行い、後の浄土宗興隆の基礎をつくりあげた学僧として尊崇されている。

近世末期の聖冏伝で、聖冏の四百年遠忌に併せて作成された『了誉聖冏禅師絵詞伝』（1819 序跋）では、直牒洞での生活について次のように語られている。

> 明年丙子四月廿三日、選択決疑鈔直牒を集成せり。始め筆をたつるの折から、佐竹義秀の

兵乱ありて、民間みな荷担してたてるさまなり。されば聖浄二門の学徒衣鉢を托するに所なくして、諸国に離散せり。師も故入難処の仏制あれば、兵戈の際にあらんもよしなく、単身笈を負て、州の阿弥陀山に隠る。〈一に不軽山と名く。常不軽菩薩応現して仏像を彫刻し給ひし霊蹤といへり〉　此山に巌窟ありて、南に向へり。太陽の光りをうけて、窟内明らかなり。師此に籠居して道業純一なり。徒弟なければ教育の営みに労せず、士女詣で来らざれば、接待のわつらひなし。わづかに乾柿を携へ行て、餓に備へ、一鉢のしばしば空しきをかへり見ず、巌もる水を硯にしたで、毫をうるほして、紙にのぞみ述作に孳々として、遂に全篇十巻を草しなせり。相伝乃義を以て文を釈し理を成す。教相行儀実に後学の模範なり。（註２）

第 4-47 図　直牒洞での聖冏（『了誉聖冏禅師絵詞伝』）

聖冏が『決疑鈔直牒』を起筆したころ、佐竹義秀による兵乱が起こったため、瓜連地方にいた僧侶たちは托鉢を行うことができず、諸国に離散していった。聖冏も戦乱を避け、単身笈を背負って、常陸の阿弥陀山に逃げ隠れた。一名に不軽山というこの山には岩窟があった。南向きのため、太陽の光が差し込み、内部は明るかった。聖冏は、この洞窟に籠居して仏道修行に専念した。弟子がい

ないので後進の指導の必要もなく、人々もやって来ないので接待の必要もない。僅かな干し柿を携えて飢えに備え、托鉢の鉢が空っぽなことを顧みず、岩壁から落ちる水を硯に入れて墨を摺って述作にとりくみ、遂に『決疑鈔直牒』十巻を完成させたという（第4-47図参照）。小稿では、直牒洞と聖冏との関係について、主に近世に成立した聖冏伝から考察する。

第2項　了誉聖冏の生涯

聖冏は、聖冏の浄土教学が浄土僧の育成プログラムである檀林教育において中心的な位置を占めたことから高く評価され、近世に数多くの伝記が編纂された。しかし異伝が非常に多く、諸説入り交じっているため全体像をつかみにくい。ここでは最古の聖冏伝のひとつ真誉相関撰『了誉上人伝』（1685）に従って聖冏の生涯を概観する。（註3）

了誉聖冏は、暦応四年（1341）正月二十五日に、常陸国久慈郡岩瀬城主であった佐竹氏の白吉志摩守義満の子として誕生した。子供がいなかった両親が、下岩瀬の明神に祈願したところ、七日を経て誕生したのが聖冏だという。五歳の時に父義満が南北朝の動乱の中で流れ矢に当たって討ち死にし、敵や賊に領地や財を奪われたため、母とともに三年にわたって流浪生活をおくった。その後、父の菩提を弔うために、母によって瓜連常福寺の開基である了実（浄土宗第六祖）に預けられ、八歳で出家、聖冏と名付けられた。

早くより非凡な才能を示した聖冏は、着実に学を修め、了実のすすめにしたがい、十五歳の時に了実の師である常陸太田の蓮勝（浄土宗第五祖）のもとで本格的に浄土教学を学んだ。さらに蓮勝のすすめにしたがい、十八歳で、相模桑原道場の定慧（鎌倉光明寺三世）のもとを訪れ、浄土の経論・教相・行儀と、『大乗起信論』『釈摩訶衍論』の二論、さらに自家他宗の書籍を幅広く修めた。

その後、白旗派の伝法や円頓戒を受けて宗要を極めた後、二十五歳で兼学の旅に出発し、諸国を遍歴。禅・真言・天台・倶舎・唯識・法相など諸宗派の教理と、和歌や神道などを学び、永和四年（1378）、三十八歳の時に常陸へ帰郷した。師・了実より璽書を受けた聖冏は、そのまま隠世するつもりだったが、下野大庭山往生院南竜坊の招請により、四、五年にわたって浄土教学を説き、また下総の千葉一族の招きにより念仏を道俗に弘めた。そして、下総の北にある横曽根談義所において本格的な浄土教学書の執筆にとりくんだが、了実が老齢となったため、四十六歳のときに常陸に帰郷、了実より常福寺を譲り受けて住持となり、さらなる浄土教学の整備をおこなった。

嘉慶二年（1388）には、瓜連常福寺が類焼、綸旨や寺領寄付の証文が焼失した。聖冏は、綸旨を求めて京都に赴き、それらが再びくだされるまで、教線の拡大や、内外の典籍の研究、浄土教学書の執筆に精力的に励んだ。常陸に戻った後は、五重相伝や白旗式状といった伝法・制戒制度をつくりあげ、浄土宗の独立教団としての体裁を整えていった。

晩年にいたって、浄土宗義を大成した聖冏は、神道や和歌の註釈書を著したり、後進の育成にあたったりしたが、義秀の乱により瓜連が荒廃し、不軽山香仙寺傍らの巌窟での避難生活を余儀なくされた。その後、応永二十二年（1415）に、常福寺を弟子の了智に譲り、師の窮状を見かねた弟子の聖聡（浄土宗第八祖）の招きにより、江戸小石川（現・伝通院）へ隠居し、応永二十七年（1420）九月二十七日、八十歳で没している。

聖冏の生涯は、決して派手なものではなく、ただひたすらに浄土教学の探求に向けられていた。聖冏の新しい浄土教学は、鎮西流白旗派の主流となり、近世に入ると宗学の根幹として高く評価され、檀林教育（浄土宗初学者のための育成プログラム）では法然教学の前に、まず聖冏教学を学ぶことが求められた。直牒洞のエピソードは、これら聖冏の学問水準の高さから生み出された伝説と言うことができるのである。

第３項　聖冏伝と直牒洞

聖冏伝の数は非常に多い。近世のものに限れば、管見の限り、十六種の聖冏伝が認められる（註４）。以下に近世諸伝における直牒洞に関する記述を抜粋し、聖冏と直牒洞との関係について考察していく（返り点は原文にあるもののみ付した。句読点は私意。以下同じ）。

①『了誉伝』　天和三年（1683）写　増上寺蔵
五十五歳応永二年冬十一月撰二糅鈔四十八軸一。次歳猛夏編二直牒十冊一。（中略）嘗避二佐竹義秀大乱一。閑二居于不軽山之巌窟一。有年。後帰二紺宮一。（中略）七十五歳応永廿二年二月二日、振二錫於武陵一。占二居於小石川無量山一。（註５）

②『了誉上人伝』　真誉相関誌　貞享頃カ　内閣文庫蔵
依義秀之兵乱冏師赤逃常陽阿弥陀山（亦名不軽山）籠屋年已久。漸世静心安而帰山。自此以下倩顧自身之生霊猶有限。到是口称名号之外、更無他慮。（中略）応永二十二年二月二日、時年七十五、江戸小石川遍卜隠居之地。称之無量山。（註６）

③『了誉上人伝』　真誉相関撰　貞享二年（1685）刊
齢已及二耳順一、竪部書籍不レ得レ述歟。所二以然一者、依二義秀兵乱一、瓜連民間聖浄二門学徒、悉離二散諸国一、安二其居一未二一日一。因レ茲、冏亦隠二常陽阿弥陀山一亦名二不軽山一。寂莫籠居焉。世上漸静謐帰レ山、抛二擲余事一、単信直行、口称三昧之外、更無二他慮一焉。奥高弟聖聡年来願言、徒二冏師閑居一、於二武江城下一、常随給仕、以酬二恩顧一、依レ之、以二草地山一附二属明誉了智房一、則為二三世別当一。此時、伝籍、円頓戒儀、別当職譲状等自染二免毫一、書以付二与之一焉。冏師時年七十五、応永二十二年乙未二月二日、於二武陵小石川一、卜二隠居地一、営二修一宇一、号二無量山寿経寺伝通院一。（註７）

④『東国高僧伝』巻十「伝通院了誉伝」　真享五年（1688）刊
因避レ乱隠二弥陀山一。有二高弟聖聡卜云者一。住二武江増上寺一。請レ冏供養。応永二十二年、冏営二一刹一。号二伝通院一。（註８）

⑤『縮白往生伝』巻上「上人聖冏」　元禄元年（1688）序

因避レ乱隠二弥陀山一。有二高弟聖聡一。住二武江増上寺一。請レ冏供養。応永二十二年、冏営二一刹一。号二伝通院一。（註9）

⑥『了誉上人行業記』　元禄九年（1696）序
師比レ及二耳順一有二義秀之乱一。瓜連之地起居不レ安。避屏二居不軽山一〈俗曰二阿弥陀山一〉念修驟淹矣。乱後復帰レ寺。従レ是放二下諸業一一行三昧之外亦無二多子一。時聖聡在二乎三縁山一。時々来覲。一日謂曰、吾師老衰。予欲レ奉二晨昏一道路非レ近以闕二安慰一。覲移二居武江一吾大幸矣。師欣然而許乃嘱二了智一主二草地一而親筆二円頓戒儀及伝持書典一以附与焉。応永廿二年二月二日、適二于武江一時年七十五得二勝地於小石川之畔一、葺二草廬一而居。（註10）

⑦『本朝高僧伝』巻十七「武州無量山伝通院沙門聖冏伝」　卍元師蛮撰　元禄一五年（1702）序
暫避二州乱一、隠二不軽山一。復帰二常福一。一日白亀負二八角鏡一。出レ自二嵓瀬一、献二冏之室一。因図二其形一、常安二机上一。（註11）

⑧『浄土列祖伝』巻一「武江伝通院了誉伝」　宝永二年（1705）
嘗テ避ケテ二佐竹義秀カ鋒乱ニ一。蟄二居スルコト不軽山之巌崛ニ一有年タリ。後チニ帰レハ二緋宮ニ一、自リ二巌瀬ノ龍池一、白亀負テ二八角ノ明鏡ヲ一献ス二師ノ倪前ニ一。黙シテ知ルレ之ヲ。即彫リテ二真像ヲ一形トル二無相ノ相ヲ一。頗ル澆季ノ亀鑑也。皆ニ七十五老応永年中季ノ春初ノ二日、振リ二錫ヲ於武陵ニ一、占ス二居ヲ於小石川無量山寿経寺ニ一矣。（註12）

⑨『鎮流祖伝』「九祖量岳伝通院聖冏禅師」　正徳三年（1713）
応永二年十一月、述二記糅鈔四十八帖一。三年綴二直牒十冊一。六年九月著二淫渭分流集一。師耳順之比、避二佐竹義秀之乱一而隠二不悋山一。白亀負二八角之明鏡一出二岩瀬之龍池一而献二之師一。師執レ之即彫二自身之像一。二十二年二月属二艸嶠於明誉了知師一、幽二棲武陵小石川無量山一学者絡繹竟為二蓮肆一。今之伝通院是也。（註13）

⑩『浄土伝灯総系譜』中「第七了誉聖冏上人」　鷺宿撰　享保十二年（1727）
適逢二佐竹義秀大乱一而負レ笈遁二去隠郡之不軽山一〈在二久慈郡川島一。今名二不軽山荘厳院高仙寺一。明誉了知開レ之為二一寺一〉又去至二武州小石川一而棲隠〈今之宗慶寺是也〉（註14）

⑪『新撰往生伝』巻一「上人聖冏」　了吟撰　寛政五年（1793）序
壅年〈同三年丙子〉四月二十三日輯二成直牒十帖一時、有二佐竹氏之乱一、郡中緇素逃二散四方一。師亦負レ笈隠二于州阿弥陀山一蟄二居巌穴一、纔携二乾柿一備二于餓一承二巌滴於墨池一筆記云〈阿弥陀山。一曰二不経山一。巌穴曰二之直牒洞一。在二久慈郡川島村一。永享四年壬子常福寺第三世明誉了智公創二立於彼山足一、報二于師恩一。不軽山荘厳院高仙寺是也〉（註15）

⑫『瓜連常福寺志』「中興第二世〈浄土宗第七祖〉西蓮社了誉聖冏上人」　摂門撰　文政・天保年間（1818－1844）頃
適逢佐竹義秀之乱而負笈遁去隠郡之不軽山。在川島村。今名不軽山香仙寺。（註 16）

⑬『三縁山志』「西蓮社　新谷たつみの角　上人略伝」　摂門撰　文政二年（1819）刊
師〈了実〉の命によりて瓜連常福寺の二世たりしかと佐竹氏の乱によりて負笈遁れて同国同郡の川島に至り高仙寺を開く又不軽山にかくるる事数年、…　（註 17）

⑭『了誉聖冏禅師絵詞伝』　鳳誉鸞州撰　文政二年（1819）序跋
明年（兼倉廿、応永三年）丙子四月廿三日、選択決疑鈔直牒を集成せり。始め筆をたつるの折から、佐竹義秀の兵乱ありて、民間みな荷担してたてるさまなり。されば聖浄二門の学徒衣鉢を托するに所なくして、諸国に離散せり。師も故入難処の仏制あれば、兵戈の際にあらんもよしなく、単身笈を負て、州の阿弥陀山に隠る。〈一に不軽山と名く。常不軽菩薩応現して仏像を彫刻し給ひし霊蹤といへり〉　此山に巌窟ありて、南に向へり。太陽の光りをうけて、窟内明らかなり。師此に籠居して道業純一なり。（註 18）

⑮『小石川伝通院志』「開山高徳　開山西蓮社了誉聖冏上人大和尚」　摂門撰　文政四年（1821）刊
此ころ当国にては小田大掾水戸長沼並太田の佐竹、近隣陸奥には岩城相馬白川二本松、下野に那須宇津宮、下総に結城多賀谷等其外大小の諸家、或は南朝方と称し、或は北京方となり、互に威を振ひ勇を争ひて片時も静ならされは、太田にも関禅ならすして同国不軽山に至り穴洞に隠れて直牒十巻を撰す〈弟子了知此所に一宇を開き不軽山高仙寺と名づく〉（註 19）

⑯『了誉上人伝』　養鵬徹定撰　安政四年（1875）
明徳四年癸酉有二佐竹氏之乱一。時師担レ箧而避二乱於不経山之嵒洞一。著二直牒十巻一。今俗呼曰二直牒洞一。後復二帰常福一。一日白亀負二八稜鏡一出レ自二嵒瀬一献二師之室一因図二其形一常安二几上一。今在二常福寺一。我　西誉上人及レ開二武之増上寺一邀レ師養焉。応永二十一年相二地於小石川一結レ茆専修。檀曠如レ廉遂成二梵刹一。号二伝通院一。（註 20）

聖冏伝における直牒洞をめぐる基本的な話形としては以下のものが挙げられる。

・聖冏は、佐竹氏の戦乱を避けるために阿弥陀山にある巌窟に避難した
・聖冏は、巌窟にて『決疑鈔直牒』の執筆を行った
・その書名にちなんで、巌窟は直牒洞と呼ばれることになった

上記十六種の聖冏伝が、これらの話形をどの程度具えているか考えてみたい。まず十六種の聖冏伝のすべてが戦乱によって阿弥陀山（不軽山・不経山）に逃れたとの記述をもつ。そのうち戦乱の詳細が記されないのが④⑤⑦。佐竹義秀の乱とするのが①⑧⑨⑩⑫⑭、佐竹氏の乱とするのが⑪⑬⑮⑯、義秀の乱とするのが②③⑥である。さらに聖冏が巌窟（洞窟・岳洞）に避難したとするのが①⑧⑪⑭⑮⑯、そのうち巌窟において『決疑鈔直牒』を執筆したとするのは⑪⑭⑮⑯であった。このうち巌窟を直牒洞と呼称するのは⑪⑯だけである。

戦乱によって阿弥陀山の巌窟に避難したことは、最古の聖冏伝のひとつ①『了誉伝』（1683）から認められる。だが、巌窟において『決疑鈔直牒』を著し、それにもとづき巌窟を直牒洞と称したとする用例は、管見の限り、⑪『新撰往生伝』の編纂された十八世紀末頃からであると考えられ、かなり時代が下ってからの呼称だったことがわかる。

『決疑鈔直牒』は、本奥によれば聖冏五十六歳の応永三年（1396）に著されたという（註21）。諸伝を見ると、香仙寺の巌窟と『決疑鈔直牒』の執筆とは本来無関係だったようだが、十八世紀末以後、直牒洞において『決疑鈔直牒』が執筆されたとの説が生まれ、一般化されたものと考えられる。

あるいは、⑨『鎮流祖伝』で応永三年に『決疑鈔直牒』が綴られたとする直後に、聖冏が「耳順之比」（六十歳頃）に戦乱により不軽山に隠れたとする記述があることから、『決疑鈔直牒』が執筆された五十六歳と、戦乱の発生時期が混同された可能性もある。

なお二十世紀初頭の浄土宗では、『決疑鈔直牒』は引文（抄出）に誤りが多いと認識されていた。誤りの原因を、大正八年（1919）に聖冏の五百年遠忌に併せて刊行された『聖冏禅師伝』では、

> 世往々直牒中不備の点あるを難ずるものあれど、既に難を避けて窟中に在り、聖教の左右に見るべきなく、引文典拠皆是れ暗記の儘であつたから、自然に誤略（あやまり）を生じたもので、寧ろ此に依って兵戈頻りに起り、民心安きことなき中にも、末代弘通扶宗護法の心肝凝って此著となつた師の非心を感佩すべきである。（註22）

と、戦乱によって典拠となる聖教類を見ることができず記憶によって記したためとするなど、直牒洞における『決疑鈔直牒』執筆を前提とした解釈が見られるのは興味深い。このように直牒洞をめぐる言説は、虚実を織り交ぜながら、聖冏伝とともに形成されていったのである。

第4項　いわゆる佐竹義秀の乱について

阿弥陀山の巌窟に避難する原因となった戦乱については諸説ある。先述の通り、聖冏伝では、概ね佐竹義秀の乱（佐竹氏の乱・義秀の乱）と考えられていた。

しかし、佐竹義秀の名が佐竹氏の中に見えないことから、ここでいう佐竹義秀の乱は、応永二十三年～二十四年（1416－1417）に起きた上杉禅秀の乱のことだと先行研究では考えられている。その根拠とされるのが、常福寺文書の「聖聡〈大蓮社酉誉〉書状写」と、それに付された副え状「了

暁副状並譲状写」である。

「聖聡〈大蓮社酉誉〉書状写」（註 23）には次のようにある。

> 一日大野へ御越候けるよし、今度承候、ゑんてん時分勿体なく存候。其上又御状ニあつかり候、尤当年ハいまた御めにかゝらす候、又常福寺のなりゆき候ありさま、くハしく物かたり申たく候へとも、武州へいそく子細候間、大野よりまかり上候。今度不入見参候条、心もとなく存候、又御状のおもて常福寺ニ悦喜申され候。御茶事ハ無子細御よろこひ候、上方ハいまた阿弥陀山ニ御座候、うりつらの事ハ、中々しかのふしとゝなり候、人民更ニ不還住候、まして僧坊・聖道・禅家、皆他国流浪の事ニ候。言語道断ニ候き。就中老師の有様、目もくれ心もきえはてゝこそ、見すて候てまかりのほり候し、御愁敷、我等悲泣何ニせんゝゝゝゝ、秋の頃ハ武州へ申度候、相構々々注進御法門ハ終夜申て候しかとも、余ニゝゝ散々ニ申され候条、二ゝ条注進候、其余ハ中々不及申候、いとゝたに浄土宗すたれ行候、憑木本ニ雨行不留風情候歟、事外浄土法門かく成行候事、歎入存候、重註文恐々謹言
>
> 横曽祢学頭進上　　酉誉

酉誉聖聡（1366-1440）は、聖冏の高弟で、東京・芝にある大本山増上寺の開基である。浄土宗第八祖として聖冏教学を内外に宣揚し、後の浄土宗拡大の基礎を創りあげた。本書状では、戦乱の影響で阿弥陀山に避難している師・聖冏のことを心配し、瓜連が「しかのふしと（鹿の臥所）」のように荒廃し、人々が離散して戻ってこない状況を言語道断だと嘆いている。また聖冏が老齢になり衰えたことを悲泣し、秋には聖聡が本拠を置く武蔵国に師を招こうと考えていること、このままで浄土宗が廃れてしまうだろうことを、横曽根学頭宛てに述べている。

聖聡の書状に年月日は記されていないが、聖聡書状に付された慶誉了暁の副え状「了暁副状並譲状写」（註 24）から、聖聡が聖冏を江戸に招こうと考えたのは、応永二十三年、二十四年以降と推測されている。副え状には次のようにある。

> 右此文者、善秀乱之時、了誉上人迯去瓜連里、籠居不軽山〈亦云阿弥陀山〉之比、先師〈酉誉上人〉自武州江戸下常陸佐竹、奉拝見了誉上人之御有様、御帰路之時、自大野被遣横曽祢之御書状也。愚〈了暁〉文安年中〈庚午〉不慮感得此御宸筆之書札。歓喜余身簡単銘肝。…（後略）
>
> 文明十二年（1480）〈庚子〉二月十八日　　了暁（花押影）

聖聡の高弟のひとり了暁（生没年未詳）は、文安年中（註 25）に思いがけず聖聡の書状を入手した。了暁によれば、聖冏が善秀の乱によって瓜連から不軽山に避難し、引き籠もっていた頃、聖聡が、師の安否を確認した後に、常陸国の佐竹から武蔵国へと帰る途中で、大野から横曽根学頭に送ったのがこの書状であるという。

先行研究では「善秀」は上杉禅秀のこととし、聖冏諸伝にあった「義秀」の「義（よし）」は「善秀」の「善（よし）」と訓が通じていること、「善秀」の「善（ぜん）」と、「禅秀」の「禅（ぜん）」の音が通じていることから混同した可能性を指摘する。「善秀乱」が上杉禅秀の乱とするならば、応永二十三年、二十四年頃の出来事と推測される。

先述の通り、聖冏が引き籠もったとされる「直牒洞」の名は、聖冏が阿弥陀山の巌窟において著した『決疑鈔直牒』の書名に由来する。もし直牒洞執筆説を採るのならば、応永三年以前に戦乱の発生を設定しなければならないが、応永三年から江戸移住の応永二十二年まで二十年近く巌窟生活をしていたとは考えがたい。

なお諸伝では、聖冏が江戸に招かれたのを応永二十二年（1415）とするものが多い。これは①『了誉伝』（1683）から見える説だが、戦乱が上杉禅秀の乱とすると、年代にずれが生じる。聖冏は、応永二十二年に弟子の了智に常福寺を譲っていることから（註26）、その後すぐに江戸に移ったとの判断がなされていたのだろう。ただし聖冏は常福寺を譲ったあと、応永二十三年の時点ではそのまま同寺に居住していたことが指摘されており（註27）、こちらも後世の伝説と考えるべきだろう。

第5項　おわりに

如上、聖冏伝の検討から、了誉聖冏上人と直牒洞との関係について概観した。不軽山香仙寺にある直牒洞は、聖冏が瓜連の戦乱を避けるために避難した巌窟である。聖冏が、巌窟にて『決疑鈔直牒』の執筆を行ったことにちなんで、巌窟は直牒洞と呼ばれることになった。だが近世に成立した十六種の聖冏諸伝を比較検討した結果、巌窟での直牒執筆の話形も、直牒洞という呼称も十八世紀末頃に現れた比較的新しい言説だったことが明らかになった。また先行研究にもとづき、戦乱が上杉禅秀の乱だったこと、聖冏が江戸へと移った年代も史実とは異なっていたことを概観した。

このように直牒洞や瓜連の戦乱については伝説としての要素が強い。だが永享四年（一四三二）十二月に、聖冏から常福寺を譲られた了智が、聖冏の十三回忌に合わせて常不軽山香仙寺を開創したことからわかるように、直牒洞が中世当時から聖冏の信仰と学問を鑽仰するための重要な場所だったことは間違いないと考えられるのである。

【註】

（註1）『浄土宗全書』19、795頁下

（註2）拙稿「鳳誉鷲州撰『了誉聖冏禅師絵詞伝』乾・坤―解題と翻刻―」『論叢　アジアの文化と思想』19、2010.12）で文政二年（1819）序跋本を翻刻した。本伝は聖冏の四百年遠忌（1819）に併せて版行されたもので、諸伝の集大成というべき性格をもつ。

（註3）真誉相関『了誉上人伝』、貞享二年（1685）刊。聖冏の伝記は数多いが、それぞれかなりの異同がある。聖冏伝については、伊藤正義「了誉伝稿」（『文学史研究』15、1974.7）、玉山成元「了誉聖冏上人伝の諸問題」（『仏教文化研究』39、1994.9）、村田昭『聖冏伝序説』（酉蓮社、2003）など参照。

（註4）中世に遡る縁起は管見の限り認められない。近世に入ってから聖冏の鑽仰が本格化したためだろう。

（註5）特別展六百年遠忌記念『浄土宗七祖聖冏と関東浄土宗――常福寺の名宝を中心に――』（神奈川県立金沢文

庫、2019）に全文の写真が掲載される。

（註６）内閣文庫 193-0082（国立公文書館デジタルアーカイブにて閲覧）。同じ真誉相関の手に成る③『了誉上人伝』と概ね同内容だが、表現の異同が複数箇所で認められる。③の草稿か。内閣文庫本は「然阿伝」と「了誉伝」を合冊したもので、奥に水戸彰考館本を明治十九年に書写したとある。彰考館本は未見。

（註７）拙著『中世学僧と神道――了誉聖冏の学問と思想』（勉誠出版、2012）参照。

（註８）『大日本仏教全書』（旧）104、（新）第 62 巻史伝部１、293 頁中。

（註９）『浄土宗全書　続』17、233 頁下～234 頁上。

（註 10）『浄土宗全書』17、413 頁下～414 頁上。

（註 11）『大日本仏教全書』（旧）102、（新）第 63 巻史伝部２、115 頁下。

（註 12）『浄土宗全書　続』16、508 頁下。摂門『小石川伝通院志』にも『浄土列祖伝』が引用される。

（註 13）『浄土宗全書　続』17、434 頁下。

（註 14）『浄土宗全書』19、47 頁。

（註 15）『浄土宗全書』17、518 頁下。

（註 16）『浄土宗全書』19、766 頁下。

（註 17）『浄土宗全書』19、336 頁下。

（註 18）註２前掲「鳳誉鸞州撰『了誉聖冏禅師絵詞伝』乾・坤―解題と翻刻―」。

（註 19）『浄土宗全書』19、699 頁下。

（註 20）『浄土宗全書』12、352 頁上。『釈浄土二蔵義』刊本の冒頭に掲載される。

（註 21）『決疑鈔直牒』「本云　応永三年丙子卯月二十三日　了誉五十六記」（『浄土宗全書』7、615 頁上）参照。

（註 22）『聖冏禅師伝』（冏師五百年遠忌準備局、1919、27 頁）参照。大島泰信『浄土宗史』（浄土宗典刊行会、1914）にも「直牒の引文に問問詭諂あるは盖参考書なく、暗記により成されたるによると云ふ」などと見える（『浄土宗全書』20、555 頁上）。

（註 23）常福寺文書「聖聡〈大蓮社酉誉〉書状写」（茨城県史編さん中世文部会編『茨城県史料』中世篇Ⅱ、450 頁、茨城県、1974）。註３前掲伊藤論文、吉水成正「聖聡書状について」（註５前掲『浄土宗七祖聖冏と関東浄土宗』所収）、宇高良哲「聖冏禅師の遺跡考――在世当時の古文書・古記録にみられる遺跡を中心に――」（『仏教文化研究』39、1994.9）参照。

（註 24）常福寺文書「了暁〈聖蓮社慶誉〉副状並譲状写」（『茨城県史料』中世篇Ⅱ、450 頁）。文明十二年（1480）に酉冏（飯沼弘経寺三世）に伝授したもの。

（註 25）文安年中（1444-1449）に庚午はない。なお直近の庚午は宝徳二年（1450）である。

（註 26）常福寺文書「聖冏〈酉蓮社了誉〉譲状」（『茨城県史料』中世篇Ⅱ、449 頁）参照。応永二十二年（1415）八月二十二日に、聖冏は了智に常福寺別当職を譲った。

（註 27）註３前掲伊藤論文参照。聖聡『選択口伝口筆』に「応永二十三年卯月十九日酉誉住常福寺所聞所記也」（『浄土宗全書』7、627 頁上）とあることによる。

第5章　総　括

まとめにかえて

今回の調査では、保存と活用を図るために岩窟の規模や特徴、摩崖仏、文字、図文など様々な情報を３次元で記録する作業を行い、基礎的なデータを作成することができた。調査・整理を通して得られた知見から直牒洞を考古学的側面と宗教的側面からまとめていくこととする。

直牒洞の考古学的側面については、第４章第３節にて稲田氏が考察しているとおりである。中央窟内の加工痕や他の横穴墓との構造比較により中央窟は横穴墓を転用したもの、左右窟は後世に造られたもので横穴墓ではないと結論づけている。また、中央窟の横穴墓としての規模であるが、他の横穴墓との比較によって、古墳時代末に造られたものと思われ、県内でも有数の横穴墓地域の中でも中央窟は、巨大な横穴墓であることがわかった。

築造時期についても６世紀後葉と比定されるもので、同時期に比定される道場塚古墳（推定全長80 m以上の前方後円墳）のすぐ北側に存在していることからも６世紀後半から７世紀前葉にかけての当地域の墓制の移り変わりを知る上で、重要な横穴墓である。

このような巨大な横穴墓を含む多数の横穴墓群がこの地域に存在することは、当該地域に位置する古墳時代前期前半期の東国最大の前方後円墳である梵天山古墳や星神社古墳の出現からはじまり古墳時代の終わりまで、ヤマト政権の東方政策が強く影響している地域であるということを裏付ける存在としても直牒洞の中央窟は重要な意味をもつ横穴墓であることがわかった。

直牒洞の宗教的側面については、第４章第４節にて鈴木氏が考察しているとおり、直牒洞と呼ばれる由縁や阿弥陀三尊に平安様式の特徴がみられること、史資料から「阿弥陀山」として知られる場所であったということがわかることから、この地域の信仰の広がりを考える意味でも重要な場所である。そして、平安時代より聖地として知られていたこの場所は、浄土宗中興の祖と呼ばれる浄土宗第７祖了誉聖冏上人が洞窟に籠り、『決疑鈔直牒』を執筆したという伝承が残ることから、中世にあってもこの地が聖域であり、信仰の地であったことが想像できる。

今回の調査により、両壁には100を超える五輪塔や文字の線刻などがあることや奥壁に近い両壁に灯りをとる穴なども確認された。調査時にその両穴にLED灯をいれ、阿弥陀三尊がどのようにみえるのかを実験したところ、洞窟の入口からもその姿が浮かび上がるかのように見えた。当時、ろうそくの明かりを使用していたことを考えると、ろうそくの火の弱さやゆらぎなどもあり阿弥陀三尊がより幻想的にみえる視覚的効果もあったと考えられる。また、五輪塔や文字、図文については不明確なものも多いため、今後の研究や分析によって明らかにされることを期待するが、直牒洞にこれだけ多くの線刻が残されていることは、少なくとも平安時代以降、中世、近世と続き、現在に至るまでこの地が1000年近く「信仰の地」として存在していることを証明していると考えられ、宗教施設としても重要な場所であると言える。

最後に、直牒洞を取り巻く環境であるが、今回の調査の要因ともなった奥壁の地衣類（又はコケ類）の繁殖や洞窟入口付近の天井壁の崩落など遺跡の保存を考えると決して良い環境ではない。地衣類

などの繁殖の原因調査については、その基礎データとして令和元年度に独立行政法人国立文化財機構東京文化財研究所の事業の一環として洞窟内の１年間にわたる温湿度及び照度計測が実施されている。文化財を保護していくためには、日常管理と経過観察がなによりも必要であるが、万が一、文化財が危機に瀕したときに、その対策を講じる上でも必要となるデータが今回の調査により得られたと考えている。

この貴重な文化財を後世に伝え続けていくためにも、今回の測量調査による計測データが十分に活かされなければならない。

写　真　図　版

図版 1

1960 年 – 1970 年の直縣洞中央窟奥壁

1996 年撮影直縣洞中央窟奥壁

図版 2

2015 年撮影直蝶洞中央窟奥壁

2017 年撮影直蝶洞中央窟奥壁

直牒洞左窟

直牒洞左窟羨道部

直牒洞左窟羨門

直牒洞左窟奥壁及び石仏

直牒洞右窟

直牒洞右窟羨道部

図版 4

直牒洞右窟玄門

直牒洞右窟奥壁及び石仏

直牒洞中央窟

直牒洞中央窟玄門（羨門側）

直牒洞中央窟前室やぐら

直牒洞中央窟玄門

直牒洞中央窟玄門付近床面

直牒洞中央窟玄室床面

直牒洞中央窟屍床（左側）

直牒洞中央窟屍床（右側）

直牒洞中央窟玄室左壁（玄門側）

直牒洞中央窟玄室左壁（中央付近）

図版６

直牒洞中央窟玄室左壁（奥壁側）

直牒洞中央窟玄室右壁（奥壁側）

直牒洞中央窟玄室右壁（中央付近）

直牒洞中央窟玄室右壁（中央付近）

直牒洞中央窟玄室右壁（玄門側）

直牒洞中央窟奥壁阿弥陀三尊

報告書抄録

ふ り が な	ぜんこうじいせきないじきてつどう
書 名	善光寺遺跡内直媒洞
副 書 名	常陸太田市内遺跡調査報告書
巻 次	
シ リ ー ズ 名	常陸太田市埋蔵文化財調査報告書
シ リ ー ズ 番 号	第16集
編 集 者 名	三井 猛
著 者 名	稲田健一、梅田由子、鈴木英之、瀬谷貴之、三井 猛、山口憲一（五十音順）
編 集 機 関	有限会社三井考測
所 在 地	〒311－1212 茨城県ひたちなか市殿山町2－10－41 TEL029-271-0554
発 行 機 関	常陸太田市教育委員会
所 在 地	〒313-0055 茨城県常陸太田市西二町2200 TEL0294-72-3201
発 行 年 月 日	西暦2021年（令和3年）3月23日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ぜんこうじいせき 善光寺遺跡 じきてつどうの せきぶつ （直媒洞 の 石仏）	ひたちおおたしまつばかちょう 常陸太田市松栄町 615	212	361002	36° 31′ 23″	140° 28′ 01″	20160924 ～ 20170331	400㎡	保存目的

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
善光寺遺跡 （直媒洞の石仏）	その他 （洞窟）	・古墳 ・平安	・洞窟 3基	・なし	中央窟には、阿弥陀三尊仏が彫られ、その左右壁面には数多くの五輪塔や図文などが彫られている。

要約	今回の調査は、善光寺遺跡内の直媒洞について記録保存を実施した。等間隔に並んだ３窟の内、中央窟は横穴墓を転用したと考えられる仏教窟遺跡である。

常陸太田市埋蔵文化財調査報告書

善光寺遺跡内直牒洞

常陸太田市内遺跡調査報告書

第16集

発行年月日　2021（令和3）年3月23日
編　　集　有限会社三井考測
〒311-1212　茨城県ひたちなか市殿山町2-10-41
TEL 029-271-0554
発　　行　常陸太田市教育委員会
〒313-0055　常陸太田市西二町2200
TEL 0294-72-3201

印　　刷　株式会社高野高速印刷
〒310-0035　茨城県水戸市東原2-8-1
TEL 029-231-0989